

ISSN 1344-2708

No. 72 Mar. 2023

MEMOIRS
of
THE MURORAN
INSTITUTE OF
TECHNOLOGY

MURORAN INSTITU
INSTITUTE OF TEC
OF TECHNOLOGY
TECHNOLOGY MU
MURORAN INSTITU
INSTITUTE OF TEC
OF TECHNOLOGY
TECHNOLOGY MU
MURORAN INSTITU
INSTITUTE OF TEC
OF TECHNOLOGY
TECHNOLOGY MU

室蘭工業大学
紀 要

第72号 令和5年3月

MURORAN HOKKAIDO
JAPAN

目 次

投稿論文

○学術論文

災害ストレスという観点から見た新型コロナの影響	前田潤, チョウルモウゲリレ	1
ストレスアクセント記述研究管見	三村竜之	18
今治市の「無尽」から考える共助の社会	永井真也	36

CONTENTS

Papers

○**Article**

The Effect of Covid-19 pandemic in the aspects of Disaster Stress.....	1
<i>Jun MAEDA, Gerile CHAOLUMENG</i>	
On a Descriptive Study of a Word-stress System From a Fieldworker's Point of View	18
<i>Tatsuyuki MIMURA</i>	
Thinking about a society of mutual assistance with reference to Imabari City's 'Mujin' Group.....	36
<i>Shinya NAGAI</i>	

災害ストレスという観点から見た新型コロナの影響

-2018 年胆振東部地震と比較して-

前田 潤*¹, チョウルモウ ゲリレ*²

(原稿受付日 令和 4 年 7 月 10 日 論文受理日 令和 5 年 2 月 9 日)

The Effect of Covid-19 pandemic in the aspects of Disaster Stress

-Compare with the effect of 2018 Iburi East Area Earthquake -

Jun MAEDA, Gerile CHAOLUMENG

(Received 10th July 2022, Accepted 9th February 2023)

Abstract

After Covid-19 pandemic, a questionnaire was conducted on the psychophysiological situation and the implementation level of preventive method and stress level toward the student who affected by Iburi East Earthquake. It is indicated that the effect of psychophysiological situation is almost same level with immediately after earthquake and prevention method, especially mask and behavior restriction, are serious stressor. Covid-19 pandemic strikes people multiple stress as disaster stress.

Keywords : Disaster Stress, Covid-19 pandemic, Earthquake, Prevention Method, Multiple Stress

1 はじめに

2019 年から世界的な拡大を続けた新型コロナウイルス感染症(以下新型コロナ)は、2022 年 7 月現在もまだ終息宣言がなく、3 年で終息したとされる 1918 年に流行したスペイン風邪を凌ぐ長期にわたる感染症被害だといえることができるだろう。日本も他の国と同様、この新型コロナによって社会経済や社会生活、人々の習慣行動、対人関係を変貌させた。日本は災害大国と言われるが、災害は、社会基盤だけでなく、個人に被害をもたらす、心身に影響を与える。この新型コロナは社会や人々に被害をもたらしたことは間違いないが、罹患して発症するという影響だけでなく、人々の心身に与えた影響はどのようなものであり、そしてそれは他の災害と比べた時、どのような特徴があると言えるのだろうか？

本論文では、2018 年胆振東部地震と新型コロナによる心身影響調査の結果を比較し、新型コロナのストレス調査結果も踏まえた上で、新型コロナが人々にもたらす影響の特徴を明らかにしようとする試みである。

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

*2 室蘭工業大学 大学院 M2

2 概要

2.1 災害と心身への影響

2.1.1 災害とは何か

災害とは何か、ということについて、様々な定義があり、決定的なものはない。

辞書的には、「天災や戦争・事故などによって受ける災い」とされる⁽¹⁾。法律的には、災害とは「異常な自然現象または人為的な事故」によって、「人間」に「大きな被害が生じる場合」のみを指す⁽²⁾。

我が国の災害対策基本法では、災害は「異常な自然現象」又は、「法令で定める原因による生ずる被害」とされる。災害後に発令される災害救助法の適用基準は、「住家の滅失(全壊)がある場合」、「多数の者が危害を受ける場合」、「避難を必要とする場合等」となっていて、客観的基準があるわけではない。

国際支援の最低基準スフェアプロジェクト⁽³⁾も IASC ガイドライン⁽⁴⁾も、「災害と戦争紛争」として災害と戦争を分けて表記する。国際赤十字・赤月社連盟では、危機的出来事として災害や戦争紛争に事件、事故、そして感染症(epidemic)を挙げる⁽⁵⁾。

医学的には、災害の定義として国際災害救急医学会(WADEM)理事長 Gunn による「広範な破壊の結果、社会が対応するのに非常な努力を要し、被災地域以外から援助を必要とする深刻かつ急激な出来事」という定義が広く知られている(日本赤十字社医療センター)⁽⁶⁾。

以上から災害とは、より広範に言えばやはり辞書的な意味で「天災・戦争や紛争・事故などによる災い」ということになるが、災害を事象から定義しようとする立場と、地震も戦争紛争も感染症も人的被害の程度とその対応能力との相関関係で操作的に定義する立場がある。

2.1.2 災害が与える心身への影響

災害は、通常に対応力を超える圧倒的な事態であり、社会基盤を覆し、自身の生命や財産の危機や被害だけでなく、家族や親類縁者、地域住民の被害を目の当たりにすることになる。

小プリニウスのベスピオ山噴火の目撃談および体験談がある⁽⁷⁾ように、古くから災害は身近な自然現象であった。ただし、災害やトラウマ体験の心理的影響について医学的に記述されるようになったのは、鉄道事故の「鉄道脊椎」であり、第一次世界大戦後の「砲弾ショック」、そしてベトナム復員兵に認められた社会不適応状態が PTSD(Post Traumatic Stress Disorder)としてまとめられ、アメリカの精神医学診断基準 DSM-III に登場した。それから PTSD は、適用範囲が広がり、災害被害も PTSD で捉えられるようになった⁽⁸⁾。日本では、1993 年北海道南西沖地震後の子供たちの心身の状態調査が初めて行われ⁽⁹⁾、1995 年の阪神・淡路大震災で PTSD が「心のケア」とともに広まり、日常用語にさえなった。

PTSD は精神疾患名であるが、PTSD の症状である過覚醒、麻痺回避、解離、侵入・再体験などの PTSD 症状は、トラウマ体験直後に見られる正常反応である。トラウマ体験後は、さらに、罪悪感や抑鬱状態、喪失による悲嘆などの認知的・感情的反応が伴うのが一般的である。

PTSD 症状は、トラウマ体験によって、安心感や安全感が損なわれたために発現すると考えられている。そのため、日常生活の回復、安心感、安全感が取り戻されると回復力(レジリエンス)が発揮され、多くの場合、症状は消退していく。しかし、トラウマ体験の程度、個人の資質や過去の経験、周囲のサポートや社会生活の程度や質によって経過は異なると考えられ、一ヶ月以上家庭生活や社会生活に支障をきたす程度に症状が続くとき、PTSD と診断され、治療が必要となる⁽¹⁰⁾。

一方、PTSD として治療を受けるようになっても、長い経過の中で人間的な成長を遂げたように見える、PTG(Post Traumatic Growth)というポジティブな変化を遂げる人が出てくることも知られている⁽¹¹⁾。

2.2 地震災害と感染症

2.2.1 地震災害とストレス

地震災害では、地震発生直後に建物や家屋の崩壊や損壊により、人々の生命や財産が奪われる。いわゆる危機的ストレスである。しかし、地震災害のストレスは、避難所ストレス、仮設住宅ストレス、生活再建ストレスと何重ものストレスが続く。同じ地震災害に見舞われても被害の程度や質には個人差が

あり、それに伴って地震災害の被害からの回復にも個人差が生じることになる。

地震の場合は余震の恐怖もある。2016年の熊本地震では、最初の地震より余震の方が大きい地震となった。この、後の地震の方が大きかったことが、次なる余震への恐怖をさらに大きくしたのであった。

地震被害が大きいと地域の再生が課題となり、ストレスが長期化、回復に個人差が生じていく。

また、救助に当たる支援者にも大きなストレスがかかる。被害や人々の苦しみを目の当たりにすることは大きなストレスであり、怒りや攻撃がしばしば支援者に向かい、罪悪感も覚えるのである⁽¹²⁾。

2.2.2 感染症とストレス

感染症と人類の歴史は古く、長い。ここで感染症と人類の歴史を紐解く余裕はないが、感染症は人の移動に伴って広がるのであり、地域全体が荒廃し、人口減少を起こした14世紀ヨーロッパの黒死病は大航海時代に至る発展、戦乱や社会経済的統合性解体による人口の流動性があった⁽¹³⁾。

日本では日本書紀に疫病の記述があり、その後も天然痘、梅毒があり、感冒や麻疹、コレラの流行は江戸時代に繰り返し起きている。特に麻疹は江戸時代20年に一度大流行の時期があったことが知られており、それは治療薬も予防薬もなく、感染しなかったり、感染しても生き残ったりしたものが20年を周期に入れ替わることで周期的流行が起きたと考えられている⁽¹⁴⁾。

1918年のスペイン風邪は日本でも流行した。世界全体での死亡者推計は4%から10%で日本の死亡率は2%で相対的に低かった。スペイン風邪の予防法は、消毒、うがい、マスク、患者の隔離であり、医療崩壊が起きて、次第に行動自粛にも注意を払うようになった。それでも日本で感染速度が他国に比べて遅かったのは、日本文化であるお辞儀や履物を脱ぐなどの習慣行動が社会的距離となり、感染拡大に抑制効果があったと考えられる。

世界的な流行となった感染症は、近年では、SARS(2003年)や新型インフルエンザ(2009年)の流行があるが、感染規模は大きなものではなかった⁽¹⁵⁾。しかし、致死率の高さは脅威となった。

ストレスという観点から感染症を見たとき、もちろん感染による身体的ダメージや致死性がストレス要因となることは間違いないが、感染症の種類によって身体的損傷や生涯免疫獲得の可否が感染症そのものへの恐れやストレスの程度の変数となる。子どもや高齢者、持病の有無など感染対象ごとの致死率の差異、感染力、予防策、治療法、予防薬や治療薬の有無もストレスの変数となる。

2.3 2018年胆振東部地震

2.3.1 地震の特徴と被災状況

2018年9月6日午前3時8分、マグニチュード6.7、最大震度7の地震が胆振東部を襲った。広範囲にわたる大規模斜面崩壊と札幌市で液状被害が観測された。わが国で初めてとなる事象として北海道全域でブラックアウトが発生、北海道全域で経済活動が停止した。明治以降の北海道の地震として初めて最大震度7を観測した直下型地震であり、甚大な被害と社会的影響が大きいものであった⁽¹⁶⁾。前日の9月5日に胆振地区は台風に見舞われ、6月-8月の降水量が平年の1.6倍であったことも土砂崩れが起きやすい条件を作ったとも指摘されている。

この地震によって災害関連死を含む43名の方が亡くなり、道内では10箇所の避難所が開設され、最大避難者数は13,000名に達した。震源地近くの厚真町やむかわ町では2018年12月まで避難所が開設された。その後800名が仮設住宅に入居し、入居期限となる2年が経過して仮設住宅入居者の全員が再び災害公営住宅などに転居することになった⁽¹⁷⁾。

地震による直接的被害は震源地近郊に集中したが、全道がブラックアウトによる影響を受け、通常の生活を全道民が脅かされたことになる。また翌年の2019年2月21日夜、M5.8最大震度6弱の大きな余震が起き、本震で被害を受けた人々に再び地震の恐怖を蘇らせた。

2.3.2 被災地での心身影響調査

この2018年胆振東部地震を受け、北海道教育局は児童生徒の心身の影響への見守りとサポートのために、緊急措置として胆振地域のすべての小中高等学校にスクールカウンセラー(SC)を派遣した。北海道

教育局は北海道臨床心理士会及び北海道 SC 協議会と共同の上、被災地での SC 活動に一定のガイドラインを提示し、心身の状態を把握するための健康アンケート調査票の提案を行なった。この健康アンケートは、日本臨床心理士会と日本心理臨床学会が作成したもので、質問項目は 6 項目、回答は「ない」「少しある」「(毎日)ある」の 3 件式と簡便なものであった。これに「そのほかに困っていること」「イライラを小さくしたり、少しでもホッしたりすること」の自由記述も加えられている。このアンケートが幾つかの小中高等学校で実施され、同一アンケートによる心身影響調査のデータを蓄積する条件が整えられた。

こうした災害後の調査は、調査のための調査になりがちであり、調査は必ず支援とセットで行うように推奨される⁽¹⁸⁾。各校で実施されたアンケートは、それぞれの学校で活用されたようだが、学校間のデータの集約や、総合化した検討には至らなかった。ただ、SC の派遣が 3 年にわたって継続された学校においては、学校が継時的に 2018 年から 2021 年まで心身影響調査を実施し、経年変化データが得られている。また、心身影響調査の一部で中学校と高校の比較検討が実施された。この比較によって得られた結果から、年齢が高い方が心身への影響が高いこと、時間が経過すると地震直後の影響は軽減するが、大きな余震の後には最初の地震直後より心身への影響が大きくなっていることが明らかにされた⁽¹⁹⁾。

さらに同じ心身影響調査が継続されたことで、結果的に、2020 年に感染拡大が始まった新型コロナウイルス感染症による生徒への心身影響調査データが得られることとなった。

2.4 新型コロナ

2.4.1 新型コロナの特性

新型コロナについては、この論文を執筆している 2022 年 7 月現在でも日本では変異株と感染拡大の懸念が新たな課題になっており、未だ収束せず全容が明らかとなる段階ではない。現在あげることの出来る新型コロナの第一の特性は、新型のため当初は未知のウイルスだったということであろう。そのため当初は予防薬も治療薬もなく、ひたすら感染予防に努めざるを得なかった。日本ではダイヤモンドプリンセス号乗客乗員の感染が注目され、北海道が全国に先駆けて感染症が広がっていき、そうした感染者の観察から新型コロナウイルスの特徴が徐々に明らかとなっていった⁽²⁰⁾。感染して 2 日から 2 週間くらいで発症するが、感染者の半数は全く無症状で過ぎ去り、発症しても 8 割が軽症、7 日目くらいで 1 割くらいが重症化して、1%が死亡。死亡者の多くは 65 歳以上で基礎疾患のある人であった。死亡率は高齢者ほど高く、これは他の肺炎と同じ傾向である。そのため高齢者に感染させないことが重要である。検査方法には、PCR 検査、抗原検査、抗体検査があるが、実際は感染していないのに感染したという結果が出る偽陽性や、その逆の偽陰性ということあり、感度と特異度が議論となった。

このウイルスの感染で人々を苦しめることになったのは、発症前 2 日間が感染力のピークである点であった。それは発症する前に感染力が最も高いということなので、全員が発症前感染の可能性のあることになり、全員との接触を避けなければならなくなる。

感染ルートは、接触感染と飛沫感染とされ、当初空気感染はないと言われたが、エアロゾル感染はあるというのが後に一般的見解となった⁽²¹⁾。感染予防のために体温測定、手指消毒、マスク、換気という個人予防策とともに、密閉・密集・密接を回避する三密回避、対人距離を取る社会的距離(ソーシャルディスタンス)を保つこと、外出自粛、移動制限という行動制限が推奨され、対人接触回避の実行が社会的に求められるようになった。都市封鎖であるロックダウンは、行動制限の極である。

人がなるべく集まらないように、休校や自宅勤務、個人的にも社会的にも各種イベント中止、三密回避のために飲食店に自粛要請が出され、マスク警察、自粛警察という現象が現れるほど感染予防策の徹底の社会的圧力が強まった。この中、感染への恐れから感染者や濃厚接触者を忌避し、差別や偏見が広がって、検査や治療を行う医療者やその家族との接触を恐れたり、医療者の子どもの登園が拒否されたりすることさえ起きた。こうした中、テレワークの普及という就業形態変化が進んだ⁽²²⁾。

これらの現象を捉え、新型コロナは疾病であるが、不安と差別が広がる、「病気」「不安」「差別」の 3 つの感染症ということで、これら 3 つを防ぐことが大切であるとの啓発が行われた⁽²³⁾。

一方、コロナ感染者の増減とワクチン開発・接種の促進があったが、日本国内でワクチン接種が開始

されたのは2021年3月からで、接種率が80%を超えるまでに半年以上の時間が必要であった。この間、停滞した社会経済活動への給付金型の支援策、イベント開催が波状的に実施され、Go to キャンペーンやオリンピック開催で日本国内は右往左往する。ワクチンが開発されてもワクチンへの不信と懐疑情報が流布し、接種に強い拒否を抱く人も現れた。コロナを完全に撲滅するのか、共存か、言うなればゼロコロナかウィズコロナか、など基本的な考えや行動に二極化が起きた。この新型コロナが招いた行動の二極化についてまとめたのが図1であり、新型コロナの特性ということが出来るだろう。

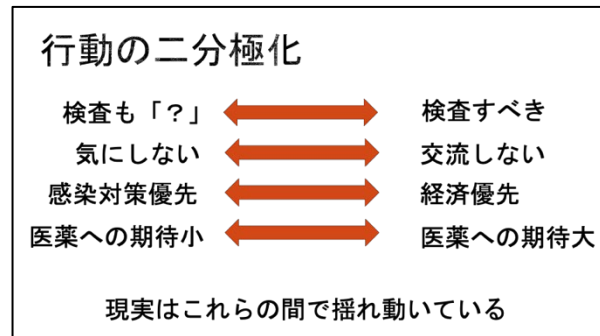


図1：コロナが招いた行動の二極化

もう一つ指摘しておかなければならない新型コロナの特性は、どこでも震源地になりうる、ということである。感染者が現れば一定条件を満たすと周囲の人は濃厚接触者と特定され、さらに感染者が増えるとクラスターと呼ばれ、その場所や感染者が隔離される。どこでもクラスターになり得ることは、人々を神経質にさせる十分条件である。入院、自宅隔離、施設隔離と隔離場所も異なって、十分な病院施設や入院施設が確保できず問題となった。

新型コロナに対する予防の徹底ということでマスクの着用は、個人の責務となって半ば義務化されたが、人前でマスクを脱ぐのに大きな抵抗を感じる「マスクパンツ」という現象が生じた。これは対人関係に今後影響をもたらす可能性がある新型コロナの副産物である。

2.4.2 北海道教育行政対応から伺える新型コロナ下の学校生活

新型コロナ感染症が学校生活に与えた影響を、北海道教育委員会が各学校に発出した通達から概観してみたい⁽²⁴⁾。

2020年2月26日に、全国に先駆けて北海道知事から全道の小中学校の休校措置が要請された。これを受けて北海道教育委員会は2月26日、全道小中学校、高等学校、特別支援学級に2月27日から臨時休校を通達要請。当初は3月4日まで、ということであったが、2月28日に安倍晋三内閣総理大臣が3月2日から春休み一杯臨時休校と決定。これに伴って卒業式、入学試験開催の取り扱いについて北海道教育委員会から通達が出され、各学校は対応を求められることとなった。同時に、休校中の過ごし方、Q&Aの作成、子供たちの居場所の確保、外出や分散分校について次々と事務連絡が行われていく。4月に向けて各社会教育施設の利用、海外帰国者対応、学校再開に向けたマスクや消毒の準備の事務連絡が行われる。

新しい年度となって、4月からは学校再開後の感染への恐れや不安、感染者、濃厚接触者への差別や偏見への留意の促しがある。布製マスクの配布も準備。分散登校や給食の取り扱いも考えられていたが、感染状況を鑑み4月14日から再び休校。5月6日までと当初予定され、5月7日と8日には午前授業を行う予定であった。この間、北海道内の様々な市町村で独自の対応がとられるようになり、全道的に5月7日にはさらに臨時休校措置がとられ、これも当初5月10日までの予定であったが、結局は5月一杯北海道全域で臨時休校措置が延長された。臨時休校中、学校は家庭学習、家庭との連携、登校日の設置、また児童生徒の心身状況の把握や児童虐待への留意の事務連絡を受け、対応が求められた。

6月10日に休校措置は解除。これ以降、全国および全道的な臨時休校要請は行われていない。ただし、学校生活全般的な生活習慣や学校行事、課外活動、放課後や休日の過ごし方全般に、感染症対策の徹底

が求められ、修学旅行などの様々な重要行事が中止、延期され、児童生徒にとって学校生活、放課後や家庭生活は一変した。

2.5 地震と新型コロナにおける心身影響関連研究

本論文では、地震災害と新型コロナという異なる災害が、心身に与える影響を比較検討しようというものである。このように異なる災害である地震災害と新型コロナの心身影響を比較した研究は数は少ないが、例えば、コロナによって休園、ステイホームが長くなり、子供たちに活発さが減ったことに、親の心配が地震と比較して高かったとする幼児を対象とした研究がある⁽²⁵⁾。その他、コロナ禍で、震災復興支援や住民支援活動を行う上での課題と対応についての研究が散見される。

2020年コロナ禍で子ども(小学生から高校生)の自殺率が前年比過去最高を記録しており、新型コロナがもたらした子どもへの悪影響が見逃せない。こうした中、子どもを対象とした包括的な調査の結果によれば、7割を超える子供になんらかのストレス症状が認められ、3割弱にうつ症状があり、休校や厳しい外出制限が終わっても、高止まり傾向にある。保護者の観察によれば、癩癩、イライラ、暴力、甘え、不安、身体症状、無気力、登校しぶりなどが報告されている⁽²⁶⁾。

大学生を対象とする調査では、感染拡大による行動制限や感染症の収束が見えないこと、経済面や生活面で不安を感じており⁽²⁷⁾、健康そのものに不安は高くないものの、講義・授業が不安・心配であり、遠隔授業で十分学習できるかという不安が高かった⁽²⁸⁾。

また、一般を対象としたSNSの投稿内容を分析した結果からは、時間が経過するにつれて、感染の不安は減じていくが、行動制限によるストレスは増大する傾向が見出されている⁽²⁹⁾。

以上の調査研究から、新型コロナによる感染不安や健康不安もあるが、コロナによってもたらされた日常生活の変化が子どもたちにストレスを与え、行動制限はストレスとなり、さらに経済不安、生活不安をもたらしていることが明らかとなった。

3 研究課題と目的

3.1 研究課題

災害には様々な種類があり、その結果としての被害も災害ごとに異なり、人々に与える影響も様々ではない。新型コロナは感染症であるから、疾病そのものとして人々に被害を与えていることは確かである。しかし、新型コロナが人々にもたらす影響は直接的な身体的ダメージだけではなく、人々の社会生活や対人関係も変化させ、人々に大きなストレスを与えることは、すでにいくつかの調査からも明らかである。

災害が、操作的定義として、対応能力を超えた被害をもたらすもの、ということであれば、新型コロナは明らかに災害である。本論文は、災害ストレスという観点から様々な災害事態の特性を捉え、人々の心身に与える影響とその要因を明らかにして、災害支援に生かそうという災害支援研究の課題の一環として位置づけられる。

3.2 本研究目的

本研究の目的は、災害ストレスという観点から新型コロナがもたらす心身への影響と、そのような影響をもたらすストレス要因について検討を行うことである。ただし、世界規模で拡大した新型コロナがもたらした心身への影響やストレス要因について包括的に検討するには、広範かつ時間的な経過の中で、大規模な標本抽出が必要になる。このことに、本研究が答えられるわけではないが、地震災害と比較してみたとき、新型コロナがもたらす心身の影響程度と行動様式が人々に与えるストレスから、災害としての新型コロナの特性を、得られた資料から仮説立てることが本研究目的である。

4 研究方法

4.1 研究方法

本研究は、地震と新型コロナによる生徒たちの心身の健康状態を把握し、必要な生徒には早期からサポートを実施することを目的に高校が実施した健康調査データをもとに行われている。この健康調査は学校責任者の了解の下でデータの提供を受けたが、データはエクセルに全て匿名化されてまとめられており、本研究では、この匿名化されたエクセルデータのみを使用して、検討が行われた。

4.1.1 調査対象とその標本特性、調査時期

調査対象は、2018年胆振東部地震の被災地のある高校に通う全校生徒である。調査時期は、地震直後の2018年9月、新型コロナの休校明けの2020年7月、および、それから約1年後の2021年9月であった。調査標本数は、2018年9月は67名(男36名、女31名)、2020年7月は60名(男36名、女24名)、2021年9月は63名(男41名、女22名)であった。

この3回の調査データは、調査対象の標本となる生徒の内訳は異なる。標本となった生徒は2018年で1年生だった学生が2020年の3年生で同様であるが、2018年と2021年では全て生徒は入れ替わっている。2020年の1年生と2年生が、2021年の2年生と3年生であるが、それ以外は異なる。

これらの標本数をまとめたのが表1で、本調査時期と日本の感染者数の推移を表しているのが図2である⁽³⁰⁾。この図は厚労省が逐次報告している新型コロナ感染症の都道府県の速報値のまとめであり、令和4年5月31日掲載分のもので、おおよその感染者の推移と本調査の時間的関係がわかる。

表1：調査の標本数

調査時期	標本数(名)	男子	女子
2018年9月	67	36	31
2020年7月	60	36	24
2021年9月	63	41	22

新型コロナウイルス感染症の国内発生動向

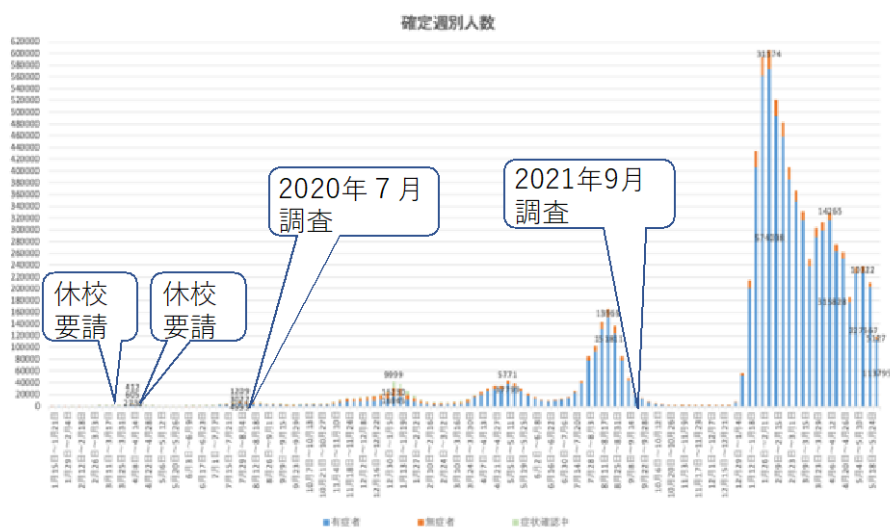


図2：調査時期と感染者患者数の推移

4.1.2 調査項目

本研究での調査は、二つに分けられる。全ての調査時期で共通して実施された心身影響調査である「健康アンケート」と、2020年7月と2021年9月に実施された新型コロナ影響調査の「新型コロナ関連 生活ストレスとストレス対策調査」の二つである。新型コロナ関連の記述式回答については、生徒のプライバシー保護や負担軽減のために任意回答となっている。しかし今回の研究対象としたのは、記述回答以外の調査データであるため、全校生徒から100%の回答が得られている。

心身影響調査項目

心身影響調査の調査項目は、2018年胆振東部地震後に北海道教育局が小中学校にスクールカウンセラー(SC)を派遣して児童生徒の心身の健康状態の把握とサポートを行った時、児童生徒の心身の状態を把握するために使用した健康アンケートという調査票と同一の調査項目である。この調査の質問項目と回答を表2に示した。生徒は、この質問項目に対して、該当する回答項目に丸をつけるのである。

表2：心身影響調査質問と回答

質問項目	回答		
	ない	少しある	毎日ある
なかなか眠ることができない	ない	少しある	毎日ある
むしゃくしゃしたり、イライラしたり、かっとしたりする	ない	少しある	毎日ある
夜中に目が覚めて眠れない	ない	少しある	毎日ある
頭やお腹が痛かったり、からだの調子が悪い	ない	少しある	毎日ある
不安になったり、悲しくなったりする	ない	少しある	毎日ある
食事が美味しくないし、食べたくない	ない	少しある	毎日ある

新型コロナ影響調査項目

新型コロナの生徒への影響調査である「新型コロナ関連 生活ストレスとストレス対策」調査は、それぞれの調査時期に、上記心身影響調査とともに、新型コロナ予防を目的に求められた新しい生活様式(消毒、マスク、換気、社会的距離を保つ、三密(密閉、密接、密集)回避、外出自粛、移動制限)に対する実施状況、難しさ、有効性、ストレス度が尋ねられている。調査項目は表3にまとめた。表3の1から3までは該当する項目にチェックを入れて回答し、4については「まあまあ」「少し」「とても」のどれかに丸をつけて回答することになっている。

新型コロナ影響調査では、ストレス対策に関する記述式回答があるが、生徒のプライバシー保護や負担軽減のために任意回答としているが、今回の研究対象は、記述回答以外の調査データとなっている。

表3：新型コロナ影響調査項目

	消毒	マスク	換気	社会的距離	三密回避	外出自粛	移動制限	その他
1	コロナ対策として実施した項目にチェック							
2	実施が難しかった、あるいは難しい項目にチェック							
3	コロナ対策として有効だと思う項目にチェック							
4	ストレスの程度「少し」「まあまあ」「とても」							

これら二つの調査項目は使用された調査票を資料として章末に掲載しているので参照されたい。

4.1.3 分析方法

心身影響調査の回答は「ない」「少しある」「毎日ある」という回答となっているので、分析にあたってはそれぞれ「0」「1」「2」と数量化し、各項目でt検定を行って地震直後と新型コロナの影響について有意水準1%で比較検討を行う。

また、新型コロナ影響調査では、実施項目、実施が難しい項目、有効だと思う項目にチェックを入れたパーセントを算出しグラフ化する。また、ストレスについては「少し」「まあまあ」「とても」を「1」

「2」「3」と数量化し、新しい生活様式の項目毎の平均値を算出しグラフ化する。

5 研究結果

5.1 研究結果

5.1.1 2018年胆振東部地震と新型コロナ後の心身影響調査の比較

回答の回収率は、男女ともに100%であり、心身影響調査の結果を、表4と図3に示した。地震直後の2018年9月と、新型コロナによる休校明けの時点の2020年7月及びそれから1年ほど経過した2021年9月の心身影響調査を比較すると、図3に示されているように、「イライラ」は2020年7月よりも2021年9月が有意に低くなっており、「中途覚醒」は2018年よりも2021年9月が1%水準で有意に低い、という結果となった。「不安・悲しさ」は5%水準で2020年より2021年で有意に低くなっており、低くなった傾向にあると見なされる。

逆に言えば、「不眠」「体調不良」「不安・悲しさ」「食欲不振」という項目で地震直後と新型コロナ下での心身の影響の程度は変わらない。また1%水準あるいは5%水準で有意差はないが、平均値の差からいえば、「イライラ」と「不安・悲しさ」は地震直後よりも、新型コロナによる休校明けの方が、高い数値を示していることがわかる。

表4:心身影響調査結果 各項目平均値および標準偏差

調査時期	不眠		イライラ		中途覚醒		体調不良		不安・悲しさ		食欲不振	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
2018年9月	0.61	0.76	0.52	0.75	0.45	0.68	0.69	0.84	0.39	0.65	0.21	0.57
2020年7月	0.52	0.62	0.67	0.71	0.33	0.66	0.67	0.73	0.5	0.75	0.27	0.61
2021年9月	0.52	0.62	0.46	0.59	0.25	0.51	0.7	0.66	0.37	0.63	0.13	0.38

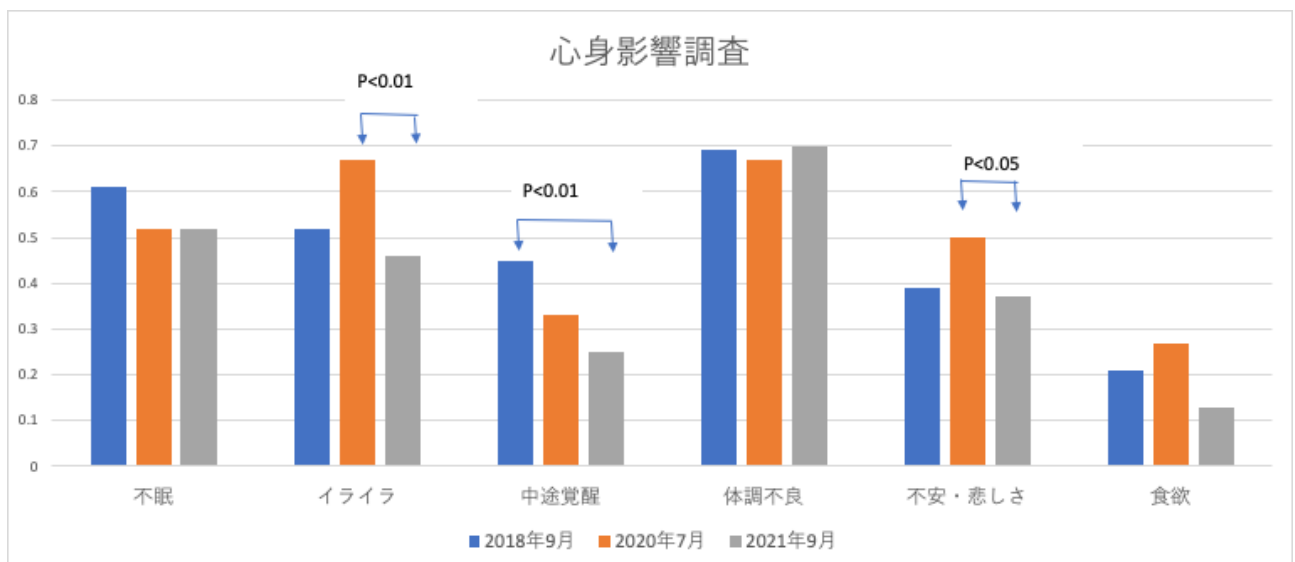


図3:「健康アンケート」心身影響調査結果

5.1.2 新型コロナ後のストレス調査 2020年7月の結果

新型コロナで休校が明けた2020年7月での、新しい生活様式として求められたコロナ対策項目について、「実施したもの」、「難しかったもの」、「有効だと思うもの」の結果をグラフにまとめたのが図4である。各項目のストレス度は折れ線グラフに示した。ストレス度の満点は3点である。

これを見ると「消毒」「マスク」「換気」は実施率も高く、それほど実施に難しさも感じておらず、有効性も感じているが、「マスク」はストレス度が高い。

「社会的距離」を保つことや「三密回避」という、対人関係や社会的関係が伴う予防対策については、実施率が低く、実施も難しく感じている。これらへの有効性については4割から5割の生徒が有効性があると考えているが、意見が分かれているということであろう。

「外出自粛」と「移動制限」という個人の社会行動に関わる予防対策については、特に「移動制限」で実施率が低く、また実施に難しさを感じており、有効であると感じる率をもっとも少なくなっている。そしてストレス度は、外出制限が最も高くなっている。

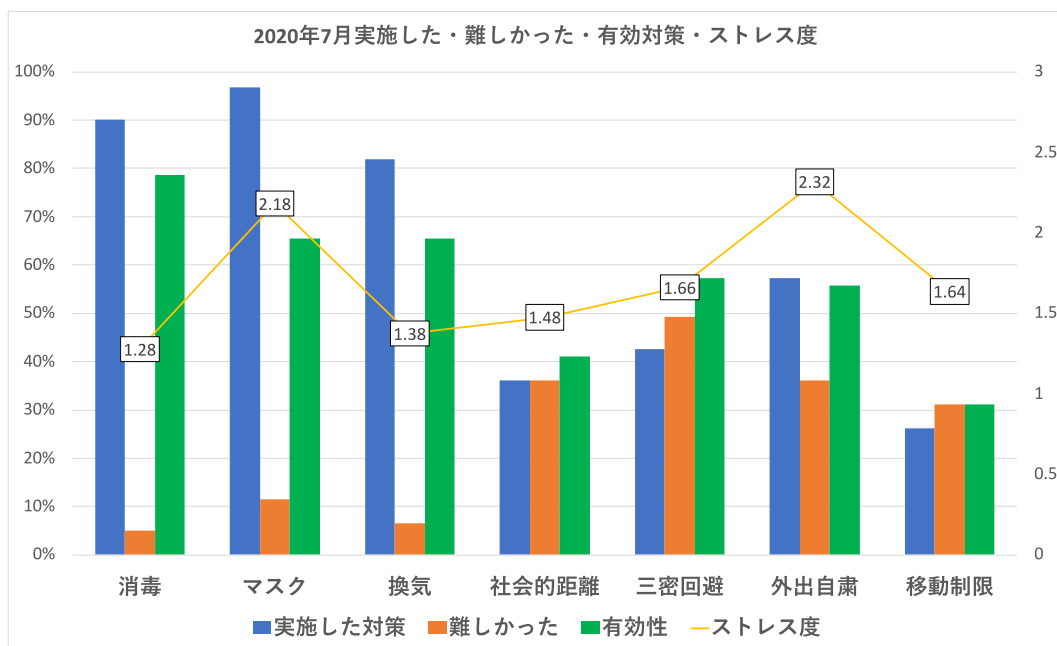


図4: 2020年7月新しい生活様式への対応とストレス度

5.1.3 新型コロナ後のストレス調査 2021年9月の結果

2018年胆振東部地震から3年が経過し、新型コロナによる新しい生活様式が強いられるようになって2年目となった2021年9月のストレス調査の結果をまとめたのが図5である。

結果の傾向は、前年の2020年7月の際とほぼ変わっていない。

「消毒」「マスク」「換気」は実施率が高く、実施に難しさも感じておらず、有効性も感じているが、前年よりやや下がっているが「マスク」のストレス度が高くなっている。

「社会的距離」を保つことや「三密回避」という、対人関係や社会的関係が伴う予防対策については、実施率が低く、実施も難しく感じている。有効性も5割前後である。

「外出自粛」と「移動制限」という個人の社会行動に関わる予防対策については、特に「移動制限」の実施率は低い、前年より実施率が上がっており、ストレス度がやはり前年度より上がっていることがわかる。

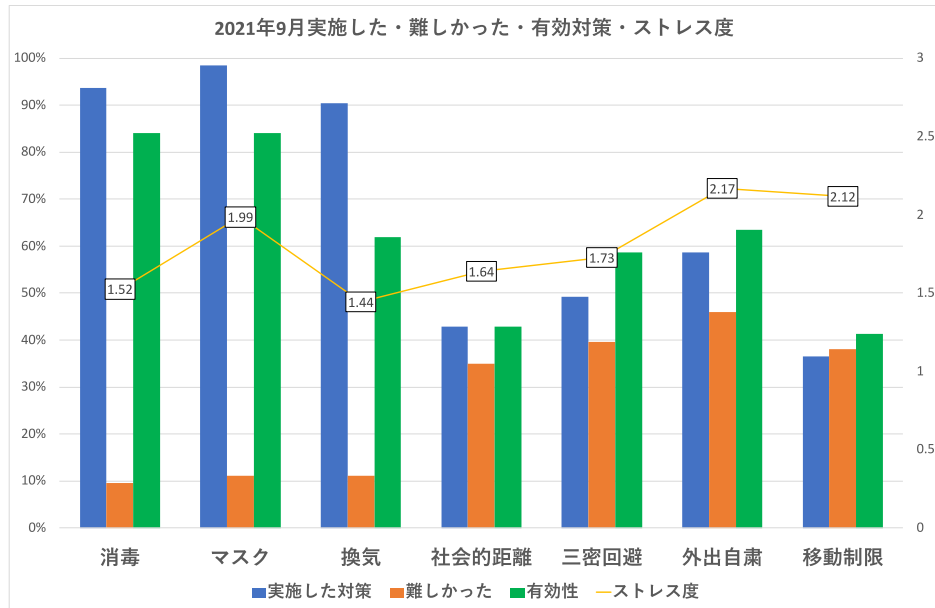


図 5: 2021 年 9 月新しい生活様式への対応とストレス度

6 考察

6.1 本研究のデータの検討

今回得られたデータ標本となった生徒たちは、確かに同一高校の生徒たちではあるが、2018 年 9 月と 2021 年 9 月では全ての生徒が入れ替わっており、同一生徒の標本データではない。それゆえ標本差の効果を考慮する必要がある。例えば、「中途覚醒」については 2021 年 9 月のデータは 2018 年 9 月より有意に低い。これは標本差を示すものである、という指摘は可能である。ただ、その場合、他の項目で有意差がないことをどう説明するのか、という問題が残る。また仮に同一標本を異なった時期に調査を行なったとしても時間効果を捨象することはできない。そのためこのような調査研究に寄与する効果因子の問題は常に念頭におく必要があると考える。

6.2 心身影響調査に見る新型コロナの影響

今回の心身影響調査の結果を見ると、新型コロナによる休校から明けた 2020 年 7 月と、その 1 年後の 2021 年 9 月のデータの傾向と、胆振東部地震後の 2018 年 9 月のデータはほぼ変わりがない、ということが言える。これは、地震災害によって受けた心身への影響と新型コロナによって受けている影響は同程度である、ということを示唆する。

ただ、各項目を詳しく見ると、「イライラ」は 2020 年 7 月よりも 2021 年 9 月が有意に低くなっている。また、「中途覚醒」も地震直後よりも 2021 年 9 月は有意に低い水準にある。一方、「不眠」「体調不良」はいずれも有意な差がなく推移している。つまり過覚醒は収まっていくが、睡眠や身体の不調感が長引いているものと考えられる。

こうした調査のベースラインはどこか、という議論がある⁽³¹⁾。この議論からは、生徒たちの心身状態はいつもこの程度にあるのではないか、という指摘につながる。しかし、先行研究の 2018 年胆振東部地震後の同一の高校で調査が行われた 2018 年 9 月と 2018 年 10 月の心身影響調査の結果によれば、1 ヶ月経過すると、ほぼ全ての項目で影響程度が低下していることが示されている。それゆえ、これらの結果はやはり、地震直後の心身の影響と同程度の影響を新型コロナは心身に与えていたのだ、と考えるのが妥当と思われる。

今回得られた結果で重要な点は、同一高校の生徒という標本特性の中で得られた心身の影響調査で、地震後と新型コロナという異なるストレス状況において、同程度の心身への影響傾向が見られた、という

ことである。そして新型コロナ休校明け直後にイライラが高まるがこれは時間経過とともに収まっていく。先行研究でも、癩癩やイライラの増加が報告されているが、本調査では、時間経過とともに、イライラは治っていく、ということが見出されている。一方、本調査では、睡眠や身体の不調感は継続し、長期化する傾向にあることが示されている。先行研究でも、ストレス症状や身体不調が生じることが報告されているが、時間経過による心身状態の変化が認められた、という点に本研究結果の独自性があると言える。

6.3 新型コロナのストレス特性

新しい生活様式は、いくつかの特性に分けることができる。「消毒」「マスク」「換気」は個人の予防策であり、「社会的距離」を保つことや「三密回避」は対人交流や社会的関係の制限を伴う。「外出自粛」と「移動制限」は個々に課される行動制限、ということができる。

この時、個人の予防策は、各人がそれぞれに行うことができるので実施率も高く、実施するのに難しくもないし、予防にとって有効性も高いと思うこともできるのである。ただ、「マスク」はストレス度が高い。しかし、他者との間に社会的距離を保ったり、密閉された空間での密集を避けたり、密接する状況を避けることは、自分一人で実施できることではない。そして、他者との親密な交流は人間関係の形成や社会的関係づくりに欠くことが出来ない。それゆえ実施率は低く、実施自体が困難となる。ただ、三密回避は予防策としては有効だと半数以上が考えている。

行動制限である「外出自粛」と「移動制限」は、「外出自粛」は半数の学生が実施しているが、「移動制限」は30%ほどしか実施できていない。通学しているので、外出も移動もしなければ学校生活が送れないという現実もあるが、回答した生徒が、通学も念頭に回答しているのか、あるいはプライベートでの外出や移動を念頭において回答しているのか、この回答からは判断がつかない。ただし、「外出自粛」が最も高いストレス度を示していることは注目に値する。また2020年7月より2021年9月の方が、「移動制限」のストレス度が高まり、「外出自粛」と同程度のストレス度となっている。

先行研究でも、行動制限がストレスを与えている、という結果が報告されているが、本調査で、コロナの長期化に伴う行動制限の長期化は、ストレス度を高めていくという結果が得られたことになり、行動制限の長期化に伴う何らかのストレス緩和策の必要性を示すものとする。

新型コロナによる行動規制が生徒たちにストレスを与え続けているのである。

学校は、教育委員会からの通達に従って、生徒たちに、感染対策として「消毒」「マスク」「換気」に努め、「社会的距離」を保ったり「三密回避」したり、「外出自粛」や「移動制限」するよう伝達し、生徒たちもこの新しい生活様式への適応を試みている。しかし、自分だけで実施が難しい項目には、苦慮しており、特に、社会生活に関わると思われる「外出自粛」や「移動制限」に高いストレスを感じている。さらに「移動制限」は、年限が経過することによってストレス度の高まりを見せる。それゆえ、こうした感染対策としての行動制限の継続が、心身影響調査に見られるような、睡眠と身体の不調感の継続と関連が高いことを示唆している。

まとめ

今回のデータは、胆振東部地震で被災した地域の高校を対象にしており、その点で、限定的な地域の一部の生徒を対象にした結果である。そのような限られたデータではあるが、新型コロナが生徒にもたらした心身への影響は、地震直後と同程度のものであった。この時点で新型コロナに感染した生徒はならず、生徒たちは各自できるだけの感染予防に努めている。他者との対人交流や社会的関係、そして行動制限では実施に苦慮しており、月日が経過して移動制限のストレス度が上がっていくのである。

新型コロナという感染症は、感染して発症してその症状に苦しみ、中には死に至るという疾病としてのストレスがある。さらにここで生徒から得られたデータが示すところによれば、感染予防のための、個人の予防策、対人交流や社会的関係の制限、行動制限が地震直後と同程度の心身への不調感が示されているくらい大きなストレスを与えている。そういう意味で、新型コロナは地震災害とは異なった特性

を持つ多重ストレス事態である、ということができる。

謝辞

本研究は、室蘭工業大学 平成 30 年度北海道胆振東部地震災害緊急調査支援補助事業 及び 科学研究費基盤研究 C 課題番号 20K03432 の補助を受けた。

文献

- (1)Oxford Languages,2022 年 7 月
- (2)法令用語研究会編, 法律用語辞典第 4 版,有斐閣,2012.
- (3)スフェアハンドブック, https://jqan.info/wpJQ/wp-content/uploads/2019/10/spherehandbook2018_jpn_web.pdf,2018.
- (4) 災害・紛争等緊急時における精神保健・心理社会的支援に関する IASC ガイドライン, https://saigai-kokoro.ncnp.go.jp/document/pdf/mental_info_iasc.pdf,2022 年 7 月 9 日現在.
- (5)日本赤十字社国際人道研究センター,コミュニティに根ざした心理社会的支援,2020.
- (6)「災害医学」からみた「救急医学」太田宗夫、日本救急医学会誌 2009 ; 20 : 101-115
- (7)国原吉之助,プリニウス書簡集-ローマ帝国-貴紳の生活と信条,講談社学術文庫 1999.
- (8)勝見敦・小原真理子編集,災害救護-災害サイクルから考える看護実践,Nouvelle HIROKAWA,2012.
- (9)藤森和美,藤森立男,北海道南西沖地震被災者の心理的サポートシステムの構築に関する研究,北海道教育大学紀要(第I部C),第 45 卷 1 号, 1994, p139-149.
- (10)日本語版用語監修 日本精神神経学会,DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル,医学書院,2014.
- (11)宅香菜子,コロナ禍と心の成長-日米における PTG 研究と大学教育の魅力,風間書房,2021.
- (12)中井久夫編訳,災害精神医学,エランベルジェ著作集 2,みすず書房,1999.
- (13)中井久夫,アジアの一精神科医から見たヨーロッパの魔女狩り,微候 記憶 外傷,みすず書房,2004.
- (14)磯田道史,感染症の日本史,文春新書,2020.
- (15)歴史学研究会編 中澤達哉・三枝暁子監修,コロナ時代の歴史学,績文堂出版,2020.
- (16)小幡行宏,北海道胆振東部地震による地盤災害の要因に関する研究,室蘭工業大学紀要,Vol.69,2020,pp3-8.
- (17)朝日デジタル,北海道胆振東部地震 3 年 800 人の被災者は新たな住まいへ,2021 年 9 月 2 日.
- (18)一般社団法人 日本心理臨床学会 特設ホームページ 心理教育のための心とからだのストレスアンケート作成について, https://www.ajcp.info/heart311/?page_id=1741,2011.
- (19)前田潤,北海道胆振東部地震後の生徒への継時的心身影響調査, 室蘭工業大学紀要,Vol.69,2020,pp41-45.
- (20)武藤義和,新型コロナウイルスの Now!!第 2 波,2020.
- (21)国立感染症研究所、新型コロナウイルスの感染経路について, <https://www.niid.go.jp/niid/ja/2019-ncov/2484-idsc/11053-covid19-78.html>(2022.3.28)
- (22)中澤高志,コロナ禍における市区町村別テレワーカー率の推計,日本地理学会発表要旨 2022S(0),30-,2022.
- (23)新型コロナウイルスの 3 つの顔を知ろう! ~負のスパイラルを断ち切るために~,日本赤十字社新型コロナウイルス感染症対策本部,2020.
- (24)北海道教育委員会 新型コロナウイルス感染症情報サイト,<https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ktk/corona.html>,2022 年 7 月現在.
- (25)賀門康博,奥 美代,コロナ禍における幼児の状況についての保護者アンケート調査からみえるもの-東日本大震災時との比較による考察-,郡山女子大学紀要,57,pp157-168,2021.
- (26)澤田なおみ,特集 コロナ禍と子どもの健康,月刊保団連 9, No.1353,2021, <https://hodanren.doc-net.or.jp/books/hodanren21/gekkan/2109.html>.
- (27)篠原久枝,コロナ感染拡大下における学生の生活課題に関する研究,宮崎大学教育学部紀要,99,pp89-101,2021.
- (28) 山根真紀・大宮ともこ・石井智也他:新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染拡大における学生の健康及び生活に関する調査報告.日本福祉大学スポーツ科学論集, 4, 65-73, 2020.
- (29) 四方田健二,新型コロナウイルス感染拡大に伴う不安やストレスの実態: Twitter 投稿内容の計量テキスト分析から,体育学研究,65,pp757-774,2020.

- (30) <https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html> における新型コロナウイルス感染症の国内発生動向より(図2は令和4年5月31日)
- (31)久蔵孝幸,蝦名美穂,前田潤, SQD(Screening Questionnaire for Disaster Mental Health)の一般実施の結果報告-2018年胆振東部地震において比較的軽微な被害の地域について-,札幌学院大学心理学紀要,Vol.4, 1号, 2021,pp 1-11.

資料1：心身影響調査票

健康アンケート		年 月 日		
名前		男 ・ 女	年	番
あなたの最近の「からだ」と「こころ」の健康について、教えてください。				
睡眠や食事について、工夫していることがあれば教えてください。				
イライラを小さくする工夫もあれば教えてください。				
	この3日間に、次のことがどれくらいありましたか。あてはまるところに○をしてください。	ない	少し ある	毎日 ある
1	なかなか、眠ることができない。	ない	少し	ある
2	むしゃくしゃしたり、イライラしたり、かっとなったりする。	ない	少し	ある
3	夜中に目がさめて眠れない。	ない	少し	ある
4	頭やお腹が痛かったり、からだの調子が悪い。	ない	少し	ある
5	不安になったり、悲しくなったりする。	ない	少し	ある
6	食事がおいしくないし、食べたくない。	ない	少し	ある
睡眠や食事そのほかのことについて、困っていることがあれば、教えてください。				
イライラを小さくする工夫や、少しでも「ほっとする」ことがあれば、教えてください。				
*日本臨床心理士会・日本心理臨床学会作成版参考				

4 それぞれの対策のストレスの程度をチェックしてください。

1=少し 2=まあまあ 3=とても

- | | | | |
|-----------|---|---|---|
| ・消毒 | 1 | 2 | 3 |
| ・マスクの着用 | 1 | 2 | 3 |
| ・換気 | 1 | 2 | 3 |
| ・社会的距離を保つ | 1 | 2 | 3 |
| ・三密回避 | 1 | 2 | 3 |
| ・外出自粛 | 1 | 2 | 3 |
| ・移動制限 | 1 | 2 | 3 |
| ・その他：() | | | |

5 ウイルス対策に有効だと思うのはどれですか？（複数回答可）

- 消毒 マスクの着用 換気 社会的距離を保つ 三密回避
外出自粛 移動制限 その他：()

6 ウイルス対策生活を送る中で、特に行っているストレス解消法がありますか？他の人にもお勧めしたい方法ありますか？

ご協力ありがとうございました。

ストレスアクセント記述研究管見 -フィールドワーカーの視点から-*

三村 竜之*¹

(原稿受付日 令和 4 年 7 月 11 日 論文受理日 令和 5 年 2 月 9 日)

On a Descriptive Study of a Word-stress System From a Fieldworker's Point of View

Tatsuyuki MIMURA

(Received 11th July 2022, Accepted 9th February 2023)

Abstract

There have been much scholarly work on word-stress systems around the world, and many theoretical issues seem to have been solved. However, several questions will still soon arise once you conduct field researches on a stress accent language: *How do we verify it's accent system as word-stress system? What prosodic features does a stress accent language has to have? Is it always straightforward to elicit word-stress patterns in research interviews? Is a stress accent language which has another prosodically distinctive feature still diagnosed as a stress accent language?* In the present paper, the author, who has been involved with descriptive investigation into the word-stress systems of the North Germanic languages, attempts to resolve these questions based on his experience and knowledge acquired through descriptive field researches.

Keywords: stress accent, field research, descriptive linguistics, the North Germanic languages, phonological/phonetic optimization, syllable weight, tempo, tune/intonation

1 背景と目的

筆者はこれまで 20 余年に渡り、デンマーク語やノルウェー語、アイスランド語といったストレス (強さ/強弱) アクセントを持つ北ゲルマン諸語の音声・音韻面の研究を、記述言語学の枠組みで進めてきた。ストレスアクセントという現象それ自体に関しては、窪菌(2002)⁽²⁾や早田(1998)⁽³⁾などの論考を通じてその本質的側面が明らかとされてはきたものの、いざ聞き取り調査 (フィールドワーク) を行ってみると、

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

筆者が研究対象とする諸言語に関しては先行研究の論究やそこから導かれた結論からは逸脱すると思しき事例も観察され、一筋縄にはいかない。ピッチ(高さ/高低)アクセントや声調の場合は、その音声特性ゆえに、聞き取り調査の困難さはフィールドワークの経験のない者であっても想像に難くない。翻ってストレスアクセントの場合は、敢えて聞き取り調査を通じて一次資料の採取を行う研究者がそもそも少ないことも手伝ってか、聞き取り調査やそれに基づく分析・解釈の難しさについては意外と理解されていないように思われる。特に、ストレスアクセントであるか否かの判定(diagnosis)に関しては Gordon and van der Hulst (2020: 75-76)⁽⁴⁾も指摘するように困難な点が多く、ストレスアクセント(Gordon and van der Hulst の用語では word-stress)は未だ数多くの問題が残されていると言っても過言ではない。

そこで本論考では、ストレスアクセントにまつわる諸問題の中でも、とりわけその定義や判定基準、一般特性を取り上げ、筆者のこれまでの調査経験に基づきフィールドワーカーの視点から問題点を考察する。併せて、これまでの聞き取り調査において実際に生じた様々な技術的な問題点やその解決策を提示することで、先に述べたストレスアクセント全般に関する本質的かつ理論的な問題点の考察をより深めていく。最後に、今後の課題として、筆者が実際にフィールドワークを行うには未だ至っていない言語から例を引き、ストレスアクセントの本質や一般特性に関する可能性について私見を述べたい。

2 アクセントの記述研究

2.1 筆者のアクセント観

既にこれまで、度々、拙論において触れてきてはいるが(三村 2014⁽⁵⁾, 2022⁽¹⁾)、本稿における筆者の議論を適切に理解してもらうためには必須の概念であるため、重複の誹りを受けつつも改めて筆者の考える「アクセント」とは何かについて述べておくことにする*2。

「アクセント」という用語を用いて何を意図するかは研究者により微妙に異なることがあり、また言語の音声的側面を扱う音声学と音韻論の間でも「アクセント」の概念は異なることがある。さらに、仮に音韻論の領域に限定したとしても、研究対象とする言語が異なれば、アクセントという用語の意図する概念が異なることもある。そこで本節では議論の出発点として共通の理解を図るべく、筆者の唱える「アクセント論」的なアクセントの捉え方について述べておく。

筆者の考えるアクセントを一言で述べるならば、ある音声特徴を利用して形作られる、特定の言語社会において慣習的に共有された語の「(抑揚や卓立の)型」である(なお、ここで「語」と呼ぶものは、厳密にはアクセントを担うまとまり、いわば「アクセント単位」とでも呼ぶべきものであるが、議論が煩雑になるのを防ぐために、ここでは便宜的に「語」という用語を用いる)。従って、アクセントが個々の言語において具体的に実現する際の音声実質は、アクセントそれ自体を定義する上では重要ではない。典型的には、例えば日本語に代表される「(音の)高さ/ピッチ」や英語に代表される「(音の)強さ/ストレス」といった音声特徴が利用されるが、先に述べた機能が果たされる限りにおいては、「声門狭窄」や「喉頭緊張」、「(音の)長さ/量(quantity)」といった音声特徴であっても理論的には可能である。

また、利用される音声特徴は、語を構成する分節音(語音)の情報から規定されるものではない。無論、アクセントの具体的な実現には分節音が影響を与えることはありうるが、アクセントの本質的な部分は分節音に固有の音声特性とは切り離されるものである。だからこそ、言語によっては、アクセントが語の知的意味の弁別に寄与しうるのである。

なお、このような「弁別(的)機能」はアクセントの主たる機能ではなく、むしろアクセントが有する本来の特性から派生的に生じた、いわば副次的な機能であると筆者は捉えている。というのも、仮に、超分節的特徴によって作られた「型」が一種類しか無く、従って最小対が存在しない場合であっても、その「型」を分節音の特性から導き出すことができない以上、分節音のレベルとは独立した自律的なレ

*2 こちらも既に拙論(三村 2014⁽⁵⁾: 79 注 4)にて述べたことであるが、ここで示す筆者のアクセント観は筆者が独自に構築したものではなく、上野善道の一連の論究(例えば 1980⁽⁶⁾, 1989⁽⁷⁾, 2005⁽⁸⁾)に代表される日本語諸方言アクセントの記述研究におけるアクセントの捉え方や、氏の理論に影響を与えたと考えられる川上夔の数々の論考(例えば 1995⁽⁹⁾)から多くの着想を得た結果、到達したものである。なお、前掲拙稿の「引用文献」リスト中の「川上夔(1990)」は筆者の誤記である。

ベルにおける現象として捉えられるからである。「型」の対立により知的意味の弁別がなされなくとも、歴とした「型」は存在するのである。

本稿の主題との関連で留意すべきは、筆者がここで「型」と呼ぶ「分節音のレベルとは独立した自律的な抑揚や卓立」の全てがアクセントではないという点である。アクセントの「型」は確かに語全体に被さるものではあるが、その「型」は語のある一か所に現れる本質的な特徴によって導き出すことができると考える。この点でアクセントは、例えば中国語北京方言に見られるような、語を組み立てる音節のそれぞれに音韻論的に有意義な抑揚や旋律が現れる「声調 (tone)」とは異なる性質を有する。

このアクセントが有する本質的な特徴、すなわち音韻論的に真に有意義な特徴は、例えばイントネーションなど、少なくとも語レベルでは音韻論的に指定(specify)する必要のない特徴を分離することによって初めて得られるものとする。例えば、本稿が対象とするストレスアクセントではないが、上野善道(2002: 166)⁽¹⁰⁾が日本語(東京方言/標準語)のピッチアクセントを記述する上での「抽出作業」を極めて要領よく述べているため、筆者の解釈と要約(三村 2022)⁽¹¹⁾を元にここに引用する:

(1) 「そば屋」の(直接的に観察・記録可能)音調とアクセント^{*3}

- a. ソ[バ]ヤ (=ソ[̄]バヤ) 【筆者注: ソバヤの「バ」のみが高い】
- b. ア[ノソバ]ヤニク (=ア[̄]ソ[̄]バヤニク) 【「バ」のほか「ノ」と「ソ」も高い】
- c. ウ[マ]イソバヤガアル (=ウ[̄]マ[̄]イソバヤガアル) 【「ソバ」は低く「ヤ」はさらに低い】

(1)は「そば屋」という語を文の様々な位置に置き、休止を入れず、またどこにも強調を置かず、全体で一息で発音したものである。(1a)では「ソバヤ」の「バ」のみが高く発音され、(1b)では「ソバヤ」の「ソ」も含めた「ソバ」が高い。(1c)では、「ウマイ」の「ウ」から「マ」にかけて音調が上昇し、「マ」の後ですぐに下降したのちそのまま「ソバ」まで続き、そこでまた下降し、そのまま進み「アル」の「ア」の後で再度下降している。(1)のデータから、いずれの「ソバヤ」においても一貫して見られる特徴は、「バ」から「ヤ」にかけて音調が下降する(ソバ]ヤ)、という点のみであり、これこそが「そば屋」のアクセントなのである(具体的に「どの高さから」下降するかは不問; 下降すること自体が一貫した特徴である)。

つまり、我々が実際の発話において直接的に観察・記録可能な現象は、実はアクセントの上にイントネーションや休止、強調等々に付随する様々な音声特徴が被さった結果生じた重層的なものであり、従って、語が単独で発音された際の抑揚や旋律を単に観察しただけではアクセントを導くことは不可能なのである。あらゆる環境や条件において抑揚や旋律を観察して分析を進め、様々な特徴を分離することによって、アクセントとして真に弁別的な属性は「抽出」されるのである。

2.2 言語の記述研究

前節にて私見を述べたアクセントと同様、言語研究における「記述」という用語も研究者によって様々な解釈がなされることが多々ある。そのため、本節では、筆者が「記述」という語でもっていかなる研究姿勢を示しているか、簡単に私見を述べておくこととする。

筆者が唱える記述研究とは、記述対象となる言語の全体像を、研究者自身が採取した一次資料に基づき過不足なく解明する研究姿勢を指す。広く言語一般に係る理論の構築を目的とはしていない。無論、言語学の枠組みにおいて言語の研究を行う以上、いかなる研究姿勢をとれども、言語全般にまつわる構造や体系、原理等々の解明を目標とすることは言を俟たない。筆者の考えでは、記述研究と言語全般に係る(真の意味での)普遍性の研究は決して相反するものではなく、前者を通じて蓄積された知見を礎として後者の理論構築が可能となる。従って、記述研究も、その見据える先には言語全般を対象とした理論の構築・解明が目標として存在はするものの、まずはその基盤となる個別言語の全容の解明を優先しているのである。本稿が対象とするストレスアクセントで言えば、理論研究の分野では既存のデータ

*3 用例において使用している角括弧 ([と]) は上野が独自に用いる音調記号であり、それぞれ「音調の上がり目」と「音調の下がり目」を指す。

ベース(例えば *StressTyp2*(Goedemans et al. 2015)⁽¹¹⁾)や先行研究に基づき論を展開するため、ストレスアクセントの判定基準などといった根本的な問題点を省みることはまずないが、翻って世界の諸言語に目を向けると、アクセントがストレスであるのか否か未だ不明な言語が多数存在することは言うに及ばず、ストレスアクセントの言語であると言われてはいるもののその全体像が未だ持って不明な言語も少なくはない。いわゆる危機言語の問題も考慮すると、個別言語のアクセントの記述研究は、むしろ喫緊の課題であると言える。

このような状況を踏まえると、研究者自身の手による一次資料の採取は言語研究においては不可欠であることは明らかである。21世紀になって久しい現在、未だ調査のなされていない言語・方言を探す方が困難ではないかと思われるが、それならば、先人たちの成果を大いに活用し広く言語全般に係る研究を進める方が効果的ではないかと考える向きも少なくない。しかし、全容の解明が著しく進んでいる言語は世界でもほんの一握りであり、筆者が対象とする北ゲルマン諸語に関して言えば、決して研究が進んでいない訳ではないものの、研究領域・分野によっては母語話者である研究者の直観に基づく研究が多数派を占め、いざ非母語話者がフィールドワーク^{*4}を行ってみると全く異なるデータが得られる、ということも未だ少なくはない。従って、余程研究が進み、信頼のおける資料・データが十分に蓄積された言語でない限りは、記述研究における一次資料とフィールドワークの重要性は未だ薄れることはない。

また、既に触れた通り、対象言語の姿を過不足なく明らかとすることが記述研究の目標であるが、このことは、記述研究の成果を教育に応用すれば、(理想論との誇りは免れないものの)仮に非母語話者であっても母語話者と同等の正確さ(流暢さではなく)で当該言語を運用することが可能となることを意味する。尤も、これはあくまでも一種の修辞に過ぎないが、それ程までに質と量の面で十分な成果を目指すのが記述研究であるということである。採取された資料・データの説明だけでなく、得られていないデータがなぜ存在しないのかも記述研究は明らかにしなくてはならない。

3 ストレスアクセントの一般特性

次節の第4節にて指摘するような問題点を残しはするものの、これまでの研究を通じてストレスアクセントにはどのような特徴が一般的に備わっているか明らかとされてきた。本節では、先行研究を通じて得られた知見を踏まえつつ、また筆者自身の研究調査の成果を交えながら、ストレスアクセントの一般的な特徴について私見を詳らかにする。

3.1 ピッチアクセント

アクセントにとってどのような音声特性が可能であるかに関しては未だ十分に解明はされていないものの、少なくともアクセントの種類として「ストレス」と「ピッチ」の二種類がありうることは周知の事実と言ってよいだろう。ここでは、後述するストレスアクセントの特徴をより明確とすべく、ピッチアクセント^{*5}とはいかなるものであるかについて概略を示すこととする。

ピッチアクセントを持つ言語・方言の代表とえば、日本語東京方言(標準語)である。既に(1)に示

*4 本稿ではここまで(そして、これ以降も)「フィールドワーク」と「聞き取り調査」をほぼ同義で使用してきた(使用する)。フィールドワークというと、とかく、交通の便が悪く電気も水道も完備されていないような僻地に赴き、現地の話者からデータを採取するような調査こそがフィールドワークであると考えて向きも少なくない。しかし筆者の考えでは、調査対象である言語・方言の母語話者、それも言語感覚に優れた母語話者が少なくとも1名確保できさえすれば、(社会言語学あるいは言語地理学的な調査を行わない限り)敢えて現地に赴く必要はない。アクセントや音声・音韻の研究においては、対象とする言語・方言の母語話者から一次資料を聞き出すことが目的であり、それが達成される限りにおいては、実際の聞き取り調査を行う場は不問であると考えて(日本語諸方言アクセントの記述研究で世界的にも著名な筆者の恩師も、優れたインフォーマントが見つかったという理由で、確か青森か金沢で鹿児島市方言のアクセント調査をなさったように記憶している。また、バントゥー諸語のアクセント研究で知られるもうお一方の恩師も、様々なバントゥー語の話者が集まるという効率の良さを重視し、ケニアなどの大都市で敢えて調査をなさっていた)。以上から、本稿では「フィールドワーク」と「聞き取り調査」をほぼ同義に用いる。

*5 基本周波数の変動の有無や大きさ、また変動が生み出す遷移(旋律)の型が音韻論的に有意義であるという意味においては、いわゆる声調もピッチアクセントに含めて扱って差し支えないが(cf. 早田 1999: 8-11⁽¹²⁾)、ここでは紙幅の都合上、また議論が煩雑になるのを回避すべく、いわゆるピッチアクセントのみを扱う。

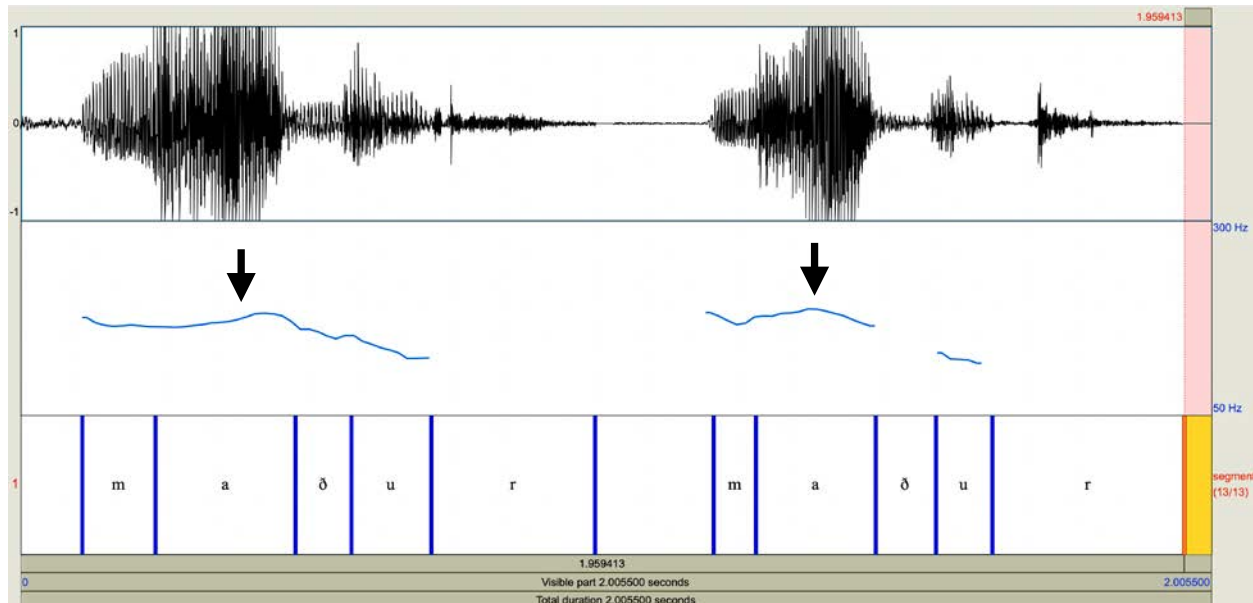


図 1: *maður* の二種類の音調 (左: 軽微な上昇調; 右: 緩やかな下降調; 矢印の箇所を参照)

した例からも明らかなように、音調の下り目、つまりは基本周波数の変動による遷移の型（旋律）が音韻論的に意味を持っている。(1)の例だけでは十分に示されていないが、例えば(2)に示す例から明らかなように、東京方言では語（厳密には「アクセント単位」）における音調の下り目の有無とその位置がアクセントとして真に有意義な特徴である：

(2) 日本語東京方言のアクセント体系(上野(2005: 241)⁽⁸⁾の表 7.3 と 7.4 を基に作成)^{*6}

キ= (気)	ハシ= (端)	オトコ= (お床)
キ] (木)	ハシ] (橋)	オトコ] (男)
	ハ]シ (箸)	オト]コ (おトコ【女性名】)
		オ]トコ (音子【女性名】)

3.2 ストレスアクセントの諸特徴

3.2.1 音調の「向き」の指定の欠如

Cruttenden (1986: 8-14)⁽¹³⁾は、イントネーションの果たす役割の点から世界の言語を ‘tone languages (例: Chinese)’, ‘intonation languages (例: English【筆者の「ストレスアクセント言語」に相当】)’, ‘pitch accent languages (例: Japanese)’ の三つに分類した。この分類では、あたかも英語のようなストレスアクセント言語にはイントネーションが存在しないかのような誤解を生じさせてしまうが、Cruttenden 自身も指摘するように、ストレスアクセント言語にもイントネーションが存在することは敢えて言うまでもない。しかし、ストレスアクセント言語におけるイントネーションのような音調現象と、前節にて概観したピッチアクセントとの間の本質的な差異に関しては、意外なほど理解されていないのではないだろうか。

アイスランド語^{*7} から具体例を引き考察したい。現実のフィールドワークでは、同じ語を何度か発音してもらっていると次頁の(3)に示すように複数の型の音調が観察されることがある(図 1^{*8}も参照)：

*6 イコール(=)の記号は上野が独自に用いる記号で、下り目がないことを積極的に示している。

*7 アイスランド語の資料は次の話者から採取した: Auður Guðmundsdóttir 氏 (女性・1955年 Reykjavík 出身)。2013年から現在に至るまでインフォーマントとして尽力してくださっている Guðmundsdóttir 氏にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

*8 図 1 並びに本稿で引用するピッチ曲線は、全て Praat (Boersma and Weenink 2022)⁽¹⁴⁾にて作成した。なお、参考までに音声波形やスペクトログラム(本図では省略)を参考に大まかな分節(セグメンテーション)を行ったが、厳密なものではない点に注意されたい。

(3) *maður* [má:ður **H(R)**L~**FL**] 「男、夫」*9

(3)に引いた *maður* では、主強勢の置かれた音節に軽微な上昇を伴う高平調 (H(R)) と緩やかな下降調(F) の二種類の音調が表れている。ここでは音調の被さっている語が *maður* という同一の語であることが既に明らかであるため、HL(あるいはRL)やFL という音調がピッチアクセントではなくイントネーションであると容易に判断可能である。しかし、実はこれだけでは、主強勢の置かれた音節 *ma-*に現れた二種類の音調 (H と F) がピッチアクセントではないことの本質を捉えてはいない。重要な点は、**主強勢の置かれた音節 *ma-*の音調の向き** (川上 泰(1973)⁽¹⁵⁾の用語) **や型(種類)が語彙レベルで音韻論的に指定(specify)されていない**、ということである。音韻論的な指定がされていないがために、H や F など種々の音調が音節 *ma-*に現れたとしても、*maður* 自体の知的意味に差異は生じず、**結果として同一の語である**と結論づけられるのである。

表面的には、ストレスアクセント言語においてもピッチアクセント言語と同様、様々な型の音調が現れうるが、型の種類や音調の動きが語彙レベルで逐一指定されているか否かが、ストレスアクセントとピッチアクセントを区別する重要な点であると言える。ある言語のアクセントがストレスアクセントであるかピッチアクセントであるかを判定する上で物理・音響学的な特性に着眼し、実験音声学的な手法を用いて判定を進める向きは決して少なくない (例: 杉藤 2012:92⁽¹⁶⁾)。しかし、本節における筆者の主張からも明らかな通り、ある言語においてアクセントがストレスであるかピッチであるかの判定の際には、具体音声それ自体に着眼するだけではなく、当該言語の音韻論における位置づけや機能をも考慮しなくてはならない。従って、実験音声学的な研究手法はアクセント解釈を裏付けることはできても、ある言語のアクセントがストレスであるか否かを判定することは不可能であると筆者は考える。

3.2.2 音韻的対立と音声実現の最適化

早田(1998: 35)⁽³⁾は、ストレスアクセントとピッチアクセント (早田の用語ではいわゆる声調も含む) を区別する重要な特徴として、母音音素の数を挙げる。早田によれば、「一般にストレスの有る母音音素の数は、ストレスの無い母音音素の数よりも多い(早田前掲書⁽³⁾)」。例えば、早田が例として引く言語の中からロシア語に関する箇所を引用すると、「ロシア語【原文ママ】では【中略】ストレスの有る母音音素として *aeiou* の五つが区別されるが、ストレスの無い母音音素」としては *aiu* の三つしか区別されない」という。早田の引くこのロシア語の例は極めて有名なものであるため蛇足の誇りを免れないかもしれないが、筆者の言葉で若干の補足をすれば、ここで早田が述べるストレスの有無と母音音素の数の間の相関関係は、いわゆるロシア語の力点の有無に応じて母音(字)の音価が交替する現象であると思われる (例: *окно* 「窓」(城田(1988: 5)⁽¹⁷⁾; 二つの *o* の音価の違いに注意)。

早田が指摘するような、ある任意の音節における主強勢の有無とその音節に現れうる母音音素の数との間の相関関係は、筆者が長年に渡り調査対象としてきたデンマーク語においても観察される。

(4) デンマーク語の母音音素 (三村 2021⁽¹⁸⁾)

/i, ɪ[ɪ]~[e], e, ɛ[ɛ]~[æ], a[a]~[ɑ], y, ʏ[ʏ]~[ø], ø[ø]~[œ], u, o, ɔ[ɔ], ɒ[ɒ]([ɔ]), ɐ, ə/

デンマーク語の母音音素は、(少なくとも現時点での筆者の分析・解釈によれば) (4)に挙げた 14 個を設定しうる (なお、母音の長短については後述)。(4)に示した母音音素の全てではないものの、([e]も含めて*10) その多くが主強勢の置かれた音節と主強勢の置かれていない音節のいずれにも現れうるが、/ə/と /ɐ/は主強勢の置かれた音節には決して現れることはない(Mimura 2009: 9)⁽²⁰⁾。

また、先に引いた早田のロシア語に関する言及を、「主強勢の置かれた音節は音韻的対立が最大限に生

*9 音声表記中の H や L, F といった記号は各音節の音調の高さや型を概略的に示したものである (H「高平調」、L「低平調」、F「下降調」; 本稿では下記の記号も使用: M「中平調」、R「上昇調」)。なお太字の音調記号は当該音節に主強勢が置かれていることを意味する。

*10 弱音節にも [e] が現れうるという事実から、schwa([ə])を [e] と同一の音素に還元させる解釈は成立しない(cf. Mimura 2005⁽¹⁹⁾)。

じ、またその音声実現形が最大限に表出しうる位置・場所である」と拡大解釈するならば、前節にてアイランド語から例を引いて考察した種々の型の音調の出現も、主強勢の置かれた音節における音声実現の最適化として捉えることが可能である。

さらに、音韻的対立ではなく音声実現形ではあるが、デンマーク語では主強勢の置かれた音節にのみ、母音の量的な区別が生じうる：

(5) デンマーク語における具体音声レベルでの母音量の区別^{*11} (Mimura 2009: 103)⁽²⁰⁾

- a. *fugl* [fú:l] ‘bird’ – *fuld* [fúl] ‘full, drunk’
- b. *larm* [lá:m] ‘noise’ – *lam* [lám] ‘lamb’
- c. *pæn* [p^hé:n] ‘neat’ – *pen* [p^hén] ‘pen’

デンマーク語では、少なくとも筆者の立場では、短母音音素と長母音音素を別個に設定する必要はなく、音節構造と音節量の制約という視点から母音量を自動的に導くことができるが(Mimura 2009: 95-105)⁽²⁰⁾、具体音声のレベルでは、(5)に示した通り、歴とした母音の長短の差異は容易に観察できる。この差異は主強勢の置かれた音節でのみ観察可能であり、強勢を欠く音節では母音は(音学的に)常に短い。

もう一例、デンマーク語から子音連結の最適化の例を引く。デンマーク語では音節頭音(onset)と音節末音(coda)のいずれの位置にも最大で三つまで子音を連結することが可能である(例えば、厳密には単一の形態素からなる語ではないものの *springsk* 「はしゃいだ・発情した」のような例が可能である; Mimura 2009: 24-30)⁽²⁰⁾。しかし、強勢を欠く音節では、子音連結は現れうるものの、子音の数と組み合わせの種類は限られており、従って、子音連結の最適化は主強勢の置かれた音節にのみ許容される現象と言える。

以上から、当該言語における音韻的対立や音声実現形の表出が主強勢の置かれる音節において最適化されるという点も、ストレスアクセントの特徴として指摘することができる。

3.2.3 音節量の制約

窪菌(2002: 60-63, 82-84)⁽²⁾は英語を例にとり、主強勢’(窪菌の用語ではアクセント)が音節に置かれる際の条件や制約として、当該音節の音節量(音韻的長さ)が関与していることを指摘する。例えば、*bead* や *bid*、*bee* という一音節語は存在しても **bi* という一音節語は存在しない。その理由として窪菌は、短母音が一音節語に生起できないためではなく、CV という構造の一音節語が不適格であると説明する^{*12}。

窪菌の指摘するような主強勢の有無と当該音節の音節量との相関関係は、筆者が長年にわたり調査を行なっているデンマーク語にも観察される(PRES., PREP, ADV.はそれぞれ現在形、前置詞、副詞を指す)：

(6) 文強勢の付与と音節量の増加 (三村 2009⁽²⁰⁾: 123; 2021⁽¹⁸⁾)

a. *Jeg bor i [i] Japan.*

I live PRES. in PREP. Japan

‘I live in Japan.’

b. *Jeg har en pung med penge i [i:’].*

I have PRES. a wallet with money in ADV.

‘I have a wallet with money in.’

(6a)では前置詞 *i* 「～の」が短母音開音節であるのに対して、(6b)で文末で副詞的に用いられた場合は長

*11 デンマーク語(の多くの方言)には、*stød* と呼ばれる声門化(laryngealization)に似た現象がある。デンマーク語学の慣習に倣い、本稿では *stød* をアポストロフィー(’)で表記している(第4.2.2節も参照)。なお、本稿で引用するデンマーク語の資料は次の話者から採取した: Evi Egholm 氏(女性・1973年 Sjælland 島の出身・Fyn 島にて生育)。2004年から現在に至るまでインフォーマントとして尽力してくださっている Egholm 氏にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

*12 窪菌(前掲書⁽²⁾: 61)は、CV 構造の一音節語が不適格という制約からさらに一歩進み、(2モーラの長さを持つ CVV 音節や CVC 音節に対して) CV 音節が1モーラの長さしか持たず、語としては短すぎる、と説明する。紙幅の都合上、詳細は拙論(三村 2008)⁽²¹⁾や上野(2001)⁽²²⁾に譲るが、筆者は英語(やデンマーク語)においてモーラは不要であるという立場をとるため、本文中では敢えてモーラという用語の使用は控えた。

母音開音節で現れている。デンマーク語では、英語と同様、副詞などの内容語は一般的に文強勢を担うが、前置詞などの機能語は文強勢を担うことはない。強勢を担うことのない前置詞として用いられた場合は短母音開音節で現れる語が ((6a)を参照)、文末の位置に現れて副詞的に、つまりは文強勢を担う品詞として用いられた場合には、文強勢の付与とそれに伴う音節量の増加の結果、長母音開音節で現れている ((6b)を参照)。ここから、デンマーク語においても、強勢を担う音節とその音節量の間には相関関係が存在し、強勢を担う音節は軽音節 (CV)であってはならないという制約が働いていることを読み取ることができる。

3.2.4 ストレスアクセントの一般特性

以上、先行研究から既に得られている知見に加え、筆者がフィールドワークを通じて採取したデータを考察した結果、ストレスアクセントには(7)に示すような一般的な特徴が存在すると現時点では結論づけることができる(議論の主題がアクセントであるため、(7)においては主強勢のみを対象としている)：

- (7) a. ストレスアクセントにおける中核的要素である主強勢が現れる音節には、高や低、下降や上昇等々、様々な高さや型(向き)の音調が現れうるが、これらの音調は語彙レベルで音韻論的に指定されている(決まっている)のではない。
- b. 主強勢の置かれる音節には当該言語において認められる音韻対立が最適化され、またその音声実現形の数も主強勢の置かれる音節において最大である。具体例は下記の通り：
 - (i) 対立する(現れうる)母音音素の数
 - (ii) 弱音節における母音音素の共起制限
 - (iii) 音調の種類・型は音韻論的に指定されていないが、実現形としては様々な音調が表出する
 - (iv) 母音量の対立はないが、長母音と短母音のいずれも実現として現れうる
 - (v) 当該言語に認められる音素配列のパターンが最大限現れうる
- c. 主強勢の置かれる音節には音節量の制約があり、短母音開音節は許容されない(*CV)。

ストレスアクセントは、「強さアクセント」ないし「強弱アクセント」という別称ゆえに、主強勢の現れる音節における音の強度(intensity)や振幅(amplitude)と相関関係があるように考えられがちであるが(早田 1998: 34)⁽³⁾、Ladefoged (2003: 92-93)⁽²³⁾の指摘するように、主強勢の置かれた音節の強度の数値はそうでない音節の数値よりも高いとは必ずしも言えない。強度や振幅よりはむしろ(7)に示した諸特徴を、ピッチアクセントにおける基本周波数のように単独ではなく、複合的に利用することで実現するアクセントがストレスアクセントなのである。

4 一般特性にまつわる諸問題と解決策

前節にてストレスアクセントの一般特性を導いたが、既に本稿の冒頭にて触れたように、母語話者をインフォーマントとする聞き取り調査の際には、一般特性に反すると思われる事例に出くわすことは稀ではない。果たして一般特性自体に誤りがあるのか、あるいは何らかの事情により一般特性に例外が生じたのか、等々、実際のフィールドワークの場面ではその都度判断を迫られることになる。本節では、筆者のこれまでのフィールドワークで得られたストレスアクセントの一般特性にまつわる具体的な問題点を取り上げ、その背後にあると考えられる要因や、調査の場面での対応策、解釈の方法について考察していく。

4.1 音調や音節量が聞き取りの手掛かりとならない時

既に前節にて議論した通り、ストレスアクセントを特徴づける要素として、(主)強勢の置かれた音節の長さ(重さ)や音調を挙げることができる。これは逆の見方をすれば、実際の聞き取り調査の場面で強勢の型、すなわち語における主強勢の位置を特定する上で、当該音節はもちろんのこと、語を構成する各音節の音節量や音調の型が有効な手掛かりになりうるということを意味するが、現実には一筋縄では

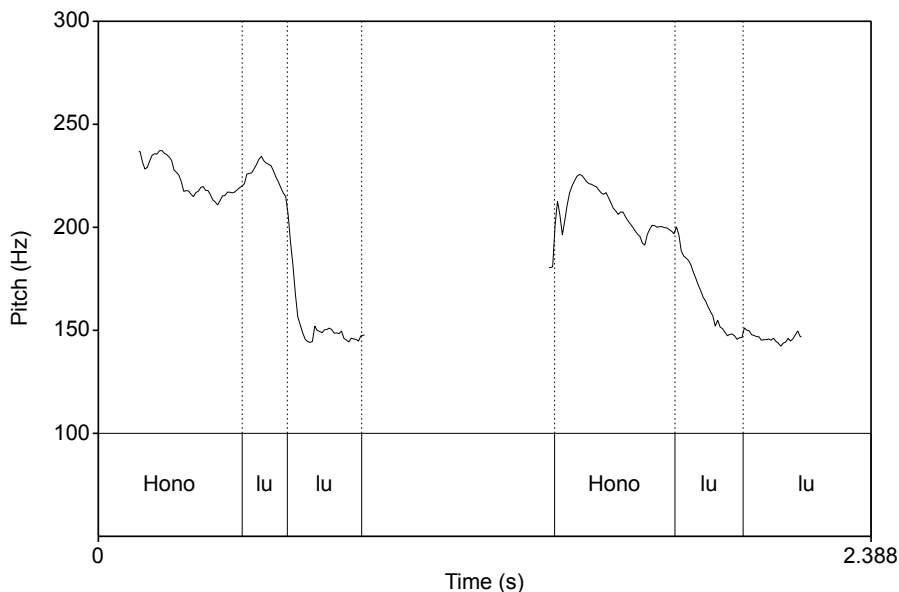


図 2: Honolulu のピッチ曲線

いかず、逆に誤った結論を導く契機にもなりうる。ここでは、筆者が 10 年弱に渡りアクセント調査を進めているアイスランドから例を引き、具体的な問題点と筆者なりの対応策について考察したい。

アイスランド語は左端の音節に主強勢の置かれる、いわゆる「一型ストレスアクセント体系」の言語である(三村 2021⁽²⁴⁾: 87; 2021⁽²⁵⁾: 80-81)。語の品詞や音節数、語種、語構造の別(複合か否か、複合語の内部構造・枝分かれ構造の別)を問わず、原則的に第一音節に主強勢が置かれるが(具体例は前掲拙論⁽²⁵⁾の p.81 を参照されたい)、外来語では例外的に第二音節以降の音節に主強勢の置かれる語もわずかではあるが確認されている(同じく具体例は前掲拙論⁽²⁵⁾の p.90 を参照のこと)。

例外的な振る舞いを示す外来語の性質(借用元の言語、音節数、音節構造、等々)は何かを明らかとすべく、2015 年以降、年に数回の頻度で筆者は外来語アクセントの聞き取り調査を行ってきた。ストレスアクセントの聞き取りというと、「強くはっきりと」聞こえる音節を一箇所特定すれば良い、と楽観する向きが殆どであろうが、実際はそれほど容易くはない。アイスランド語(のみならず一般的にゲルマン諸語)では外来語のほとんどは二音節以上の多音節語で、例えば *KENgúra*^{*13}「カンガルー」や *MARsipan*「マジパン【食品】」のように、語を構成する音節の音節量が一つでも異なれば(例:*MAR.sí.pan* 重・軽・重音節)、主強勢の位置の特定はそれほど困難ではないものの、同一構造の音節が連続する(と綴りの上では推定される)語、例えば *Fukushima*「福島【地名】」、*Honolulu*「ホノルル」、*ukulele*「ウクレレ」(以上、開音節の連続)、*Hong Kong*「香港」、*bensín*「ガソリン」(閉音節の連続)の場合は、どこに主強勢が置かれているかを特定するのは容易ではない。

また、インフォーマントにとってその外来語がどれくらい馴染みのあるものであるかの度合いに起因するものと思われるが、全ての音節がほぼ均一のテンポや長さで発音されることも稀ではなく、さらに多音節語ゆえにリズムも生じ、聴覚的に卓立した音節が果たして主強勢の所在により卓立して聞こえるのか、あるいはリズムの拍によるものなのか、判別は難しい。特にリズムの拍により卓立していると思しき音節にもやや高めの音調や下降調が現れうるため、音調が聞き取りの手掛かりにならないどころか、誤って主強勢の位置を聞き取ってしまうことすら起こりうる(図 2 の *Honolulu* のピッチ曲線も参照されたい; 図左のピッチ曲線では第三音節 *-lu-* がやや高く現れているため、主強勢が *Ho-* に置かれているのか

*13 本文中では煩雑になるのを防ぐべく音声表記を割愛するが、その場合は、代替策として語例を大文字書き(例: *KEN-*)することで、当該音節に主強勢が所在することを示す。なお、アイスランド語の正書法では一部の母音字に *accent aigu* を付すことがあるが、強勢の所在とは無関係である点にくれぐれも留意されたい。

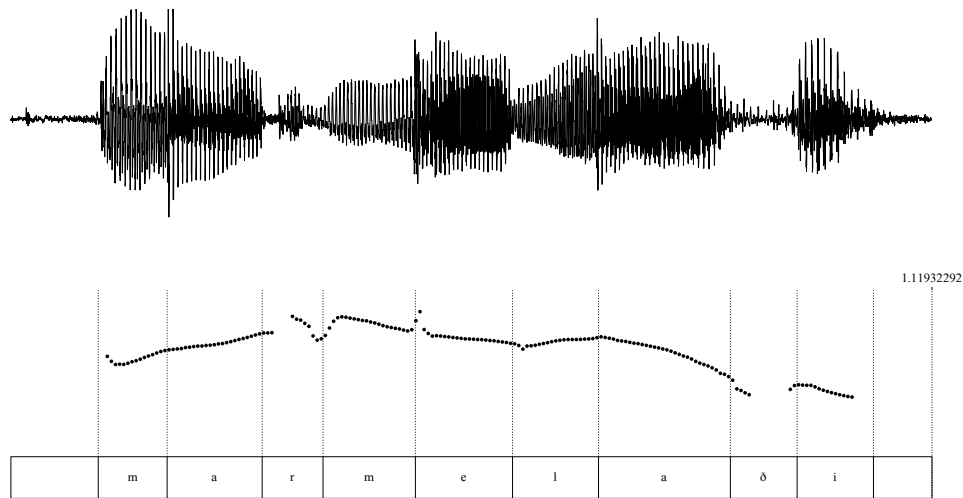


図 3: *marmelaði* の音声波形とピッチ曲線
(第三音節 *-la-* の下降調のため *marmeLAði* のように聞こえる)

*-lu-*に置かれているのか判別しづらい; 図右の場合は基本周波数の遷移から *Ho-*に主強勢が置かれているように判断可能だが、第三音節 *-lu-*に下降調が現れ、それに伴い持続時間も(長母音として表記可能なほど)やや長いため、*Ho-*に主強勢が置かれていると即断し難い)。特に筆者のインフォーマントは日本の小・中学校に相当する教育機関でアイスランド語とデンマーク語の教師として教鞭を執るためか、囁んで含めるようなゆったりとしたテンポの発音になることが多く、語を構成する音節の長さが均一になりやすく、音調を手掛かりに主強勢の位置を特定することも難しい。

このような事態を回避すべく、筆者は調査項目の読み上げを依頼する際、度々「早口で」との要望を出すものの、調査者が求める「早口」と一般の話者が認識する「早口」とでは指す概念が異なるのであろうか、結果としてはテンポの速い発話というよりは、単に口先だけでぞんざいに発音したような読み上げになってしまうことが多い。そこで筆者は、度重なる思案の結果、次の三つの手法を組み合わせた補助的な方法を併用することで語全体にかかる音調や抑揚の型をコントロールし、なるべく自然なテンポの発話を採取している: (1) パソコンのプレゼンテーションソフト等を用いて読み上げの間隔を一定に調整する; (2) キャリア文の特に文末の位置に語を置くことで語全体にかかる音調や抑揚の型を一定にする、(3) 複合語の後部要素に組み込むことで採取したい語(目標語 **target word**)にかかる音調や抑揚の型をなるべく一定にする。以下、それぞれの手法について詳しく述べていくこととする。

まず一つ目のプレゼンテーションソフトを用いた発話テンポのコントロールから始める。これは具体的には、プレゼンテーションソフトで目標語を一つずつ記載したスライドを作成し、各スライドが自動的に切り替わる間隔(秒数)を一定にするというものである。実際の調査では、まず調査票を用いた読み上げ・聞き取り調査を先に行い、調査ノートへの記録は済ませてある。読み上げ調査の際には、発音や語義の確認等のために何度も発音し直してもらうことになるが、そこでは目標語は様々なテンポで発音されることになる。一通り読み上げ・聞き取り調査が終わった後、ノートパソコン(やタブレット端末)上でスライドを使用した読み上げ調査を行う(実際の調査では少なくとも3回は行う;1回目は練習という位置づけ)。スライドが切り替わり次々と目標語が提示されることで、一つの語に費やす時間を短縮させ、可能な限り自然なテンポでの発話を引き出すことが可能となる。

但し、スライドを用いて発話テンポをコントロールすることで、一連の目標語の読み上げに一種のリズムを生じさせてしまい、また直前の語の影響を受けることで、その語本来の強勢型とは異なる型で読み上げられてしまう危険性もある。そのような問題点を解消すべく、筆者はキャリア文や複合語を使用

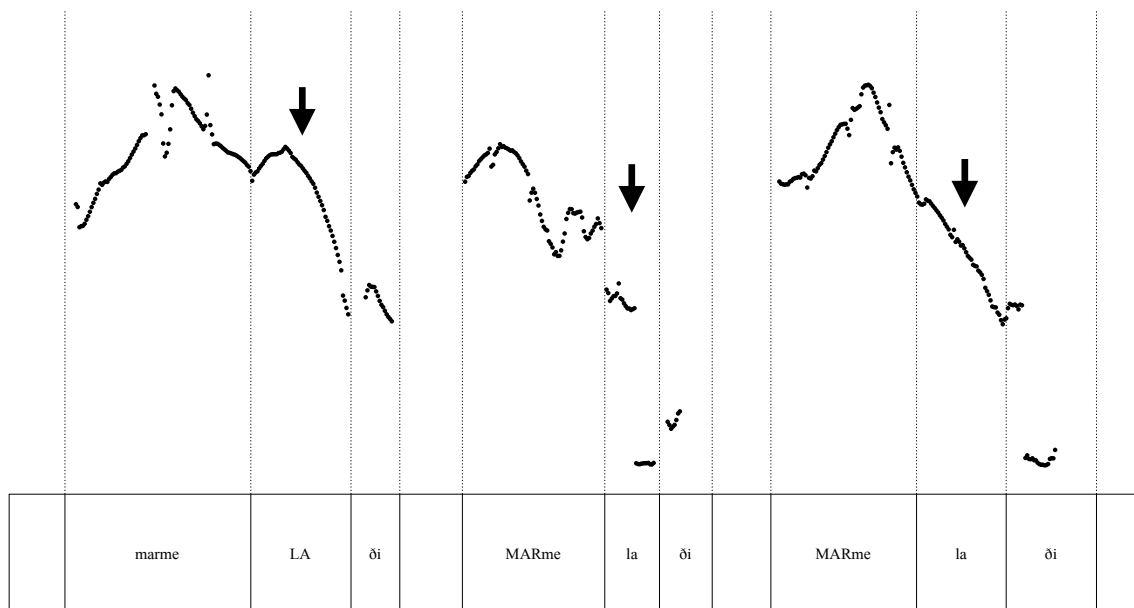


図 4: *marmelaði* のピッチ曲線 (左から単独形・キャリア文・複合語の順)

した読み上げ調査も併用している。

具体例として *marmelaði* 「マーマレード」という語を取り上げて説明する。調査票の読み上げ・聞き取り調査を行った当初は、筆者には *MARmelaði* と *marmeLAði* (-LA-は長母音開音節) の二つの型で揺れているように思われた (前頁の図 3 も参照のこと)。話者に馴染みのない外来語であれば、複数のアクセント型の間で発音が揺れるということは決して珍しくはないものの、*marmelaði* は語源的には外来語ではあるものの、むしろアイスランド語には定着していると言っても過言ではない語であるため、話者の中で複数の強勢型が揺れるというのは考えにくい。他の可能性としては、*marmelaði* がデンマーク語を經由して取り入れられた外来語であり (Magnússon 1989⁽²⁶⁾: 606)、筆者のインフォーマントがデンマーク語の運用能力を有する^{*14} がために、デンマーク語の *marmeLAde* と同じ型の強勢型で発音したとも考えられる。

では、*MARmelaði* と *marmeLAði* のどちらがアイスランド語として「正しい」アクセントなのか。この判定をすべく、筆者は、*marmelaði* を文末の位置に置いたキャリア文や *marmelaði* を後部要素とする複合語の読み上げ・聞き取り調査を行う。実際に調査に用いた具体例を(8)に示す:

(8) キャリア文と複合語の具体例

a. (i) *Sagðir-ðu marmelaði?* 「*marmelaði* って言ったんですか？」
said-you marmalade

(ii) *Já ég sagði marmelaði.* 「ええ、*marmelaði* と言ったんです。」
yes I said marmalade

b. *jarðarberjamarmelaði* 「莓ジャム」

< *jarðarber* 「莓」 + *marmelaði* 「マーマレード、ジャム」
(cf. *jarðarber* < *jörð* 「土地」 + *ber* 「ベリー」)

目標語をキャリア文の末尾に置くことの利点は、文の一部に組み込むことで目標語が単独で発話された際に生じるリズムによる卓立を可能な限り抑え、また文のイントネーションを目標語に被せることで

*14 アイスランドでは、1999 年まで日本の小・中・高等学校に相当する教育機関においてデンマーク語が第一外国語として学習されていたため、出生年代や受けた教育によっては、デンマーク語の高い運用能力を有するアイスランド人も少なくはない。

単独で発話された際に現れる音調の動きの幅を小さくすることが可能となる点にある。キャリア文に組み込まれた発話を数回観察することで、目標語において一貫して現れる卓立、つまりは主強勢の位置を特定することが可能となる。目標語を複合語の後部要素に組み込む利点も同様である(前頁の図4も参照のこと; 図左の単独形で表れている第三音節-*la*-の下降調(矢印の箇所を参照)が、図中央のキャリア文内での発話や図右の複合語内部での発話では抑えられている一方(同じく矢印の箇所を参照)、第一音節 *mar*-の音調の高さは維持されている点に注意)。

4.2 複数種類のアクセントの共存という誤謬

言語によっては、ストレスアクセント言語であると推定されながらも、主強勢を担う音節に知的意味の弁別に寄与する音調など語彙レベルでの音韻論的な指定が必要な韻律特徴が現れるものもある。フィールドワークにおける聞き取りの困難さもさることながら、どのように音韻解釈するかが重要な問題となる。以下、筆者が実際に調査をしたノルウェー語とデンマーク語を例にとり、具体的な問題点や解決策について考察していきたい。

4.2.1 音調の向きが有意義なストレスアクセント

既に述べたとおり、ストレスアクセントの言語であっても主強勢の置かれた音節には様々な型の音調が現れうるが、これらの音調は音韻論的に指定されたものではなかった。しかしながら、筆者がこれまで調査した言語の中には、ストレスアクセント言語であると推定されながらも主強勢を担う音節の音調の種類が弁別的、すなわち語彙レベルで音韻論的に指定しなければならないものもある。本節では、ノルウェー語南西部方言(*Sandnes*/サンネス方言)から具体例を引き、ストレスアクセントの判定基準や音調の解釈について論じていく。まず(4)を参照されたい:

(9) ノルウェー語南西部方言(*Sandnes* 方言^{*15}; 三村(2014: 80)⁽⁵⁾の表記等を一部変更)

a. *leser* [lé:r.sə HL] 「読む(現在形)」- *lese* [lé:r.sa FL] 「読む(不定形)」

b. *avtale* [á:v.t^hà:là HML] 「約束する」- *avtale* [á:v.t^hà:là FML] 「約束」

(9a)と(9b)のいずれペアにも主強勢を担う音節に H(高平調)と F(下降調)の二種類の音調が表れており、いわゆる知的意味の弁別がなされている。この意味においては、*Sandnes* 方言のアクセントをピッチアクセント(の一種)と分析することも不可能ではないものの、以下に述べるような特性を有するがゆえに、*Sandnes* 方言はストレスアクセントの言語であると推定するのが妥当である。

第一に *Sandnes* 方言には音節量の制約が存在する。筆者の調査した限りにおいては、文レベルでリズムの拍を担いうる語(内容語 *content words*)、換言すれば単独で主強勢を担いうる一音節語で、CV 音節の話は一例も得られていない。また、後述する主強勢と音調との依存関係を論ずる際に引く(10)の例からも主強勢の有無と音節量の相関関係は読み取れる。例えば、単独ではアクセントを担い得ない機能語(*function words*)である *henne* 「彼女を」が、談話レベルでのフォーカス(強調)が置かれて文アクセント(リズムの拍)を担うことに伴い、短母音開音節構造から長母音開音節構造へと音節量が増加している。

さらに *Sandnes* 方言には、主強勢の置かれた音節における音韻対立や音声実現形の最適化^{*16}(第 3.2.2 節を参照)も観察される。例えば、*Sandnes* 方言に認められる音節頭音並びに末尾における子音連結の型は、(逆説的に聞こえる嫌いはあるが)主強勢の置かれた音節では全て現れる一方、強勢を欠く音節ではごく一部の組み合わせしか現れ得ない。また、詳細な議論は稿を改めるが、*Sandnes* 方言は音節構造や音節量の制約から母音量を規則で導くことが可能であると筆者は考えており、従って、母音音素は量的な長短の)対立は示さないと解釈するが、母音の音声実現形としては長短いずれの長さも観察される。重

*15 ノルウェー語 *Sandnes* 方言の資料は次の話者から採取した: Brede Tingvik Haave 氏(男性・1988年 *Sandnes* 出身)。2009年11月から2012年9月までの長きに渡り、ほぼ毎週、インフォーマントとして筆者の調査に貴重な時間を割いて協力して下さった Tingvik Haave 氏にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げる。

*16 ここで述べる「最適化」は拙論(三村 2014⁽⁵⁾: 82)において「体系的優位性」と呼ぶ概念に相当する。本稿では早田(1998)⁽³⁾の知見を踏まえて「最適化」という用語を新たに導入したが、二つの用語が表す概念は本質的に同じである点に留意されたい。

要な点は、音声レベルでの母音の長短の区別は強勢の置かれた音節でのみ観察され、弱音節では短母音しか現れ得ないということである。

以上から、Sandnes 方言のアクセントをストレスアクセントであると推定することは極めて蓋然性が高い。では、主強勢の置かれた音節に現れる二種類の音調はどう位置付けるべきか。主強勢の置かれた音節に音韻論的に有意義な複数種類の音調が現れる現象は Sandnes 方言に限られたことではなく、他のノルウェー語の方言やスウェーデン語諸方言、デンマーク語の一部の方言にも観察される。これら諸言語・諸方言の研究の歴史は長いものの、一つの言語・方言の音韻論の中でストレスアクセントと音韻論的に有意義な音調をいかにして統一的に位置付けるかについて明言した研究は、(拙論(三村 2014⁽⁵⁾), 三村 2022⁽²⁷⁾)を除いては)寡聞にして未だ耳にしたことがない。また、安易にストレスアクセントとピッチアクセントが同一言語内に共存しているという解釈もありうるが、管見に及ぶ限りではこのような論究は未だ目にしたことがなく、言語記述の経済性(economy)の点からも決して好ましい解釈とは言えない。

このような背景に鑑みて、筆者は、Sandnes 方言をはじめとするいわゆる「ピッチアクセント」を持つとされる方言のアクセントを、音調の型が音韻論的に有意義な二種類の主強勢を持つストレスアクセントと捉えてきた。論拠としては、例えば Sandnes 方言においては、強勢と音調が音韻論的に同一の資格を有しているのではなく、一種の依存関係にあることが挙げられる。(10)に論拠を示す(便宜的に標準語の正書法を使用して例文を提示する; なお、大文字書きの箇所は強勢の所在を示す):

(10) 主強勢と音調の間の依存関係(三村 2014⁽⁵⁾: 82-83; NOM.と OBJ.はそれぞれ主格と目的格)

a. *Jeg liker henne.* 「私は彼女が好きです。」

I NOM. like PRES. she OBJ.

[eg M ²li:gə FM hɥ L]

b. (*Hvem liker du?* 「君は誰のことが好きなの?」に対する答えとして)

Jeg liker HENne. 「(僕は) 彼女のことが好きなんだよ。」

I NOM. like PRES. she OBJ.

[eg M li(:)gə MM ¹hú: H~F]

c. (*Han liker henne ikke, . . .* 「彼は彼女が好きじゃない(けど)、. . .」に続く発話として)

(men) *JEG liker henne.* 「(でも,) 僕は(彼女が) 好きなんだよ。」

(but) I NOM. like PRES. she OBJ.

[(men) ¹é:g H~R li(:)g(ə) M(M) (h)ɥ L]

(10a)の文は特にどこにも強調を置かずニュートラルなリズムで読み上げられた文で、文を構成する三つの語の内、動詞である *liker* がリズムの拍を担っている。一方、(10b)に示した文は、形態統語論的には(10a)の文と同一の構造を有してはいるが、談話において先行する疑問文 *Hvem liker du?*との繋がりから人称代名詞 *henne* にフォーカスが置かれ、その結果、動詞 *liker* の有する強勢が消失するとともに、同じく本来有していた音調(F)も消失している(FがMと交替している)。また、(10c)の文は、(10b)の文とフォーカスの置き方は異なるものの、同様に動詞 *liker* の強勢が失われており、それに付随して本来の音調(F)も失われている。このような強勢の有無と音調の消失は、強勢と音調が Sandnes 方言の音韻論において対等の位置づけがなされていると仮定しては説明のできない現象であり、音調の存在が当該音節における強勢の所在を前提とする、いわば音調が強勢に従属した関係を想定しなくては説明ができない。

以上の議論から、Sandnes 方言のアクセントはあくまでもストレスが基盤であり、音調の種類^{*17}が異なる二種類の主強勢を持つストレスアクセント体系であると結論づけることができる。

*17 紙幅の都合上、詳細は拙論(三村 2014⁽⁵⁾)に譲るが、厳密には音調の「種類」ではなく「有無」である。

4.2.2 声門化の有無が有意義なストレスアクセント

前節にて考察したノルウェー語 Sandnes 方言に類する事例としてデンマーク語(地域共通方言)を挙げることができる。既述の通りデンマーク語にもノルウェー語諸方言と同様に弁別的な音調を持つ変種もあるが、筆者が長年に渡り調査を続けているデンマーク語は声門化(laryngealization, creaky phonation; デンマーク語学の慣例では *stød* と呼ぶ)の有無が音韻論的に有意義である。

Stød という語自体は英語の ‘thrust’ に相当する意味の語で、そこから窺い知ることができる通り、聴覚的には声門閉鎖音に酷似しており、語を発音する際に一種の「つまづき」や「突っかかり」があるような印象を与えるものの、実際には声門の完全な閉鎖はむしろ稀である(*stød* の生理・音響音声学的な側面については Fischer-Jørgensen (1989)⁽²⁸⁾や Smith (1944)⁽²⁹⁾が詳しい)。

Stød は、(論を先取りする形となるが)強勢を伴う音節(CV 構造以外の音節)の韻律部(rhyme)に現れる。(11)に示す通り、単母音閉音節構造の場合、末尾子音(coda)には制約があり、阻害音(obstruents)には *stød* は現れない(デンマーク語学の慣例に倣いアポストロフで *stød* を表記する):

(11) *stød* の現れうる音節構造*¹⁸

a. V:(C) ⇒ 長母音の伸ばし部分に顕著に *stød* が現れる

e.g. *bi* [bɪ:] ‘蜂’, *fugl* [fú:l] ‘鳥’

b. VR(C) (R は /ð, j, l, w, m, n, ŋ, r/) ⇒ R に顕著に *stød* が現れる

e.g. *fuld* [fúl] ‘酔っ払った’, *angst* [áŋst] ‘恐怖’

上記の構造を満たす音節全てに *stød* が現れるわけではなく、従って、(単一の形態素からなる具体例は著しく乏しいものの) *stød* の有無で知的意味の弁別がなされる最小対も存在する:

(12) *stød* の有無で対立する最小対(三村 2018⁽³⁰⁾: 21)

a. *haj* [há:] ‘鮫’ — *hej* [há] ‘はじめまして’

b. *hund* [hún] ‘犬’ — *hun* [hún] ‘彼女は/が’

ここまで概観してきたデンマーク語の *stød* も、前節にて論じた Sandnes 方言の音調と同様、ストレスアクセントの一変種として解釈することが妥当であり、その論拠も Sandnes 方言の音調と同様、強勢ととの間の依存関係である。論拠として複合語を例に引く:

(13) 強勢と *stød* の依存関係(三村 2021⁽¹⁸⁾)

a. *sygehusbibliotek* [sý:y.hus.bi.bli.o.t^hé:k^h] ‘hospital library’

(< *sygehus* [sý:y.hù:s] ‘hospital’ + *bibliotek* [bi.bli.o.t^hé:k^h] ‘library’)

cf. *sygehus* (< *syge* [sý:y] ‘disease’ + *hus* [hú:s] ‘house’)

b. *sygehusvæsen* [sý:y.hus.vè:.sæn] ‘hospital service’

(< *sygehus* + *væsen* [vé:.sæn] ‘service’)

(13a)と(13b)はいずれも三要素からなる複合語である。(13a)は前部要素 *sygehus* (*syge* と *hus* から成る)が既に複合語であり(*syge* と *hus* から成る)、そこに後部要素 *bibliotek* を付加したものである。注目すべき点は、*sygehus* がさらに大きな複合語である *sygehusbibliotek* の前部要素となる際に *sygehus* の後部要素-*hus* が本来有していた(副次)強勢が新たな後部要素-*bibliotek* に移り、結果として-*hus*-が弱音節となっている点である。強勢の消失に伴い-*hus*-は元来有していた *stød* も失っているが、これは *stød* の出現が当該音節における強勢の所在を前提としていることを表している(次頁の図5も参照のこと)。

以上から、デンマーク語のアクセントもストレスを基盤とし、声門化の有無で異なる二種類の主強勢を持つストレスアクセント体系であると結論づけることができる。

*18 (11b)の R は鳴音(resonant/resonant)の意; 音素表記中の/R/は筆者の設定した接近音音素で、二重母音の音節副音(後半部分)として実現するものを指す(Mimura 2009⁽²⁰⁾を参照)。

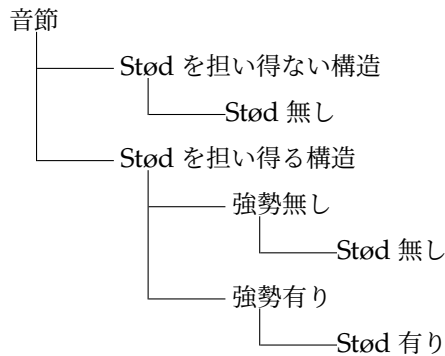


図 5: 強勢と stød の間の依存・階層関係

5 結語

5.1 まとめ

以上、本稿では、ストレスアクセントの定義や判定基準といった理論的な側面とフィールドワークにおける聞き取りの問題といった実践的な側面について、先行研究から得られた知見と筆者のこれまで行ってきたフィールドワークの成果や経験に基づき考察した。

なお、ストレスアクセントの理論的な問題点としては、ストレスの段階・程度（音韻論的な意味での強勢を何段階設定しうるか）や主強勢の位置を規則で導きうるかといった点も議論に値するが、既に私見を公にしているため（三村 2003⁽³¹⁾; 2008⁽³²⁾）、また紙幅の都合から、本稿では割愛した。

5.2 ストレスアクセントの可能性と多様性: 今後の課題に代えて

既に第 2.2 節にて触れたように、ストレスアクセントの類型論的研究は著しい発展を見せてはいるものの、そこで引き合いに出されている言語のアクセントの全容は未だ不明なものも多く、果たして真にストレスアクセントであると考えて良いか否かという事例も少なくはない。本稿ではノルウェー語やデンマーク語の考察を通じて音調の型や声門化の有無が有意義なストレスアクセントを提唱したが、その他にも様々な韻律的特徴を兼ね備えたストレスアクセントを持つ言語が存在しても決して不思議ではない。今後、様々な言語のアクセントの記述研究がより深く進められることが望まれる。

最後に本節では、今後の課題の一つとして、未だフィールドワークを行うには至っていないものの、北ゲルマン諸語のアクセント史との関連から、ここ数年筆者が高い学術的関心を寄せているエストニア語^{*19}を取り上げて、ストレスアクセントの可能性や多様性について考察したい。

エストニア語は音韻論の研究はむしろ進んでいる部類に入るものの、アクセントに関してはストレスであるか否かは明確ではない。エストニア語の音韻論 (Tauli 1956⁽³⁴⁾) や韻律現象 (Kuznetsova 2019⁽³⁵⁾)、伝統的な口承歌謡における韻律を扱った研究 (Ross and Lehiste 2001⁽³⁶⁾) では、stress や stressed / unstressed syllable といった語が用いられており、エストニア語のアクセントがストレスであることをうかがわせる。その一方で、エストニア語は、次頁の(14)に示すように母音量のほか子音量も音韻論的に有意義であると言われている（語例の英語訳は Kuznetsova 2019⁽³⁵⁾ と Fox 2000⁽³⁷⁾ に依る；音声表記は松村・宮野 2012⁽³⁸⁾ の付属 CD の音声を筆者が表記したもの）:

*19 エストニア語と同じくウラル語族のフィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属するリーブ語 (リヴォニア語, Livonian; 長らく消滅の危機に瀕する言語として位置付けられてきたが、2013 年 6 月に最後の話者が他界) にはデンマーク語における stød に近似する韻律現象があると報告されており (Kiparsky 1995/2018⁽³³⁾)、また本文にて後述する通り、筆者の観察ではエストニア語にも声門化に似た現象が観察されるため、北ゲルマン諸語のアクセント史研究の観点から筆者は近年、エストニア語に学術的な関心を持っている。

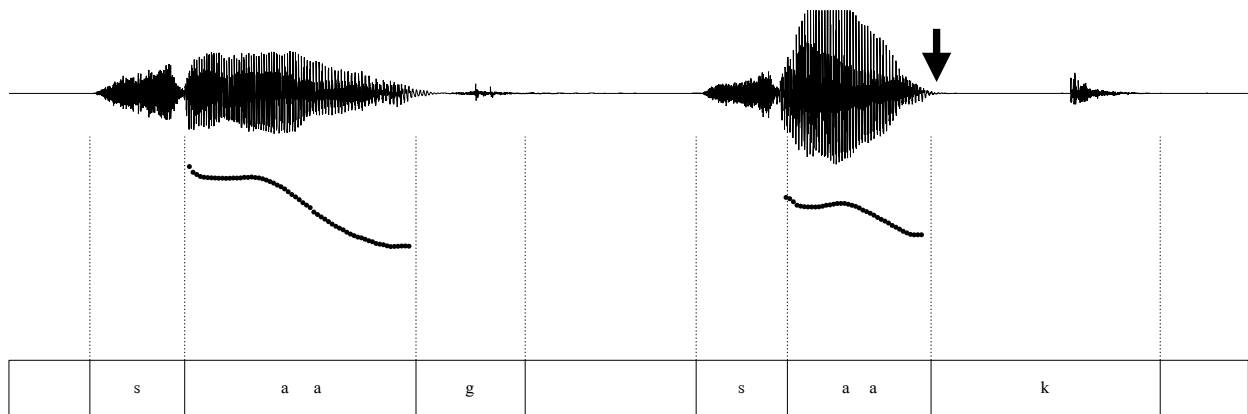


図 6: *saag* と *saak* の音声波形とピッチ曲線

(14) エストニア語における母音量と子音量の対立例

a. *sada* [sáda] ‘100’ – *saada* [sá:da] ‘send’

b. *saag* [sá:g] ‘saw’ – *saak* [sá:g̊g̊] ([sá:ʔg̊]) ‘yield, harvest’

本研究で導いたストレスアクセントの一般特性が正しいとすれば、母音の長さ（母音量）が音韻論的に有意義である（知的意味の弁別に寄与する）ことは例外的である。現に、(14b)の語例の音声波形とピッチ曲線を示した図6から読み取れるように、同じく長母音（母音連続と解釈か？）と表記される箇所の持続時間は著しく異なり、従って、エストニア語における母音量の対立は、例えば日本語における「おじさん」と「おじいさん」の対立におけるものとは異質なものかもしれない。この意味ではエストニア語がストレスアクセント言語である可能性は未だに残されている。

また、(14b)から明らかなように、エストニア語には子音量も音韻論的に有意義であると考えられているものの、録音資料に基づく筆者の観察では、*saak* の長母音（母音連続？）から後続する子音連続にかけて聴覚的に声門閉鎖音や声門化に似た音声を観察することができ（図6の矢印の箇所）、単純な重子音とは異なるように思われる。音声波形の精査を通じて声門化の有無等を明らかとする必要があるが、エストニア語は、日本語におけるような意味での母音や子音の単純な（換言すれば、離散的な単位である母音あるいは子音音素を二倍する形での）量的対立を示す言語ではなく、もっと複雑な形で母音や子音が量的対立を示すストレスアクセント言語である可能性は残されている。今後の詳細な記述研究調査が期待される。

謝辞

*本小論の内容の一部は、北海道言語研究会主催の第22回研究例会(2022年3月28日、室蘭工業大学)における筆者の口頭発表(三村 2022)⁽¹⁾に基づいている。同口頭発表の際に貴重なコメントを下された聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。また、本稿に対して貴重なコメントや助言を下された匿名査読者の方々にも併せてお礼を申し上げたい。なお、前述の口頭発表や本稿において引用する資料・データの採取は、全て JSPS 科研費の助成を受けて行った(課題番号: 15K16729, 20K00594)。

文献

【慣例に倣えばアイスランド人の名前は「ファーストネーム ミドルネーム ラストネーム」と記すべきだが、本稿ではその他の欧米の著者名と同様、「ラストネーム, ファーストネーム ミドルネーム」の順に記した】

- (1) 三村竜之, アクセント研究諸概念管見, 北海道言語研究会第22回研究例会, 2022.
- (2) 窪菌晴夫, 音節とモーラの機能, 窪菌晴夫、本間猛編, 音節とモーラ, 東京: 研究社, 2002, p1-96
- (3) 早田輝洋, 「アクセント」早わかり, 月刊言語 Vol. 7, No. 3, 東京: 大修館書店, 1998, p32-39
- (4) Gordon, Matthew K. and van der Hulst, Harry, Word-stress systems, Eds., Carlos Gussenhoven, Aoju Chen, The Oxford Handbook of Language Prosody, Oxford: Oxford University Press, 2020, p66-77.
- (5) 三村竜之, ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言における音調のアクセント論的解釈, 室蘭工業大学紀要, 第63号, 2014, p77-91
- (6) 上野善道, アクセントの構造, 柴田武編, 講座言語学第1巻 言語の構造, 東京: 大修館書店, 1980, p87-134
- (7) 上野善道, 日本語のアクセント, 杉藤美代子編, 講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上), 東京: 明治書院, 1989, p256-300
- (8) 上野善道, 音の構造, 風間喜代三, 上野善道, 松村一登, 町田健, 言語学第2版, 東京: 東京大学出版会, 2005, p256-300
- (9) 川上泰, 日本語アクセント論集, 東京: 汲古書院, 1995.
- (10) 上野善道, アクセント記述の方法, 飛田良文, 佐藤武義編, 現代日本語講座第3巻 発音, 東京: 明治書院, 2002, p163-186
- (11) Goedemans, Rob, Heinz, Jeffrey, and van der Hulst, Harry, StressTyp2, 2015, <http://st2.ullet.net>
- (12) 早田輝洋, 音調のタイポロジー, 東京: 大修館書店, 1999.
- (13) Cruttenden, Allan, Intonation, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
- (14) Boersma, Paul, Weenink, David, Praat: doing phonetics by computer, Version 6.2.14, 2022, www.praat.org. 【2022年6月1日アクセス】
- (15) 川上泰, 日本語アクセント法, 東京: 学書房, 1973.
- (16) 杉藤美代子, 日本語のアクセント、英語のアクセント: どこがどう違うのか, 東京: ひつじ書房, 2012.
- (17) 城田俊, ロシア語発音の基礎, 東京: 研究社, 1988.
- (18) 三村竜之, デンマーク語 Stød 研究の諸問題: 通時論と共時論の両側面から最善の音韻解釈を探る, 国立国語研究所プロジェクト共同研究「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第7回オンライン研究発表会(2021年6月4日), 2021.
- (19) Mimura, Tatsuyuki, Phonology of Danish Schwa: with special reference to stød-sandhi, 東京大学言語学論集 24, 2005, p141-157
- (20) Mimura, Tatsuyuki, Issues in Danish Word-prosody: A Synchronic Description, 未刊行博士学位請求論文: 東京大学大学院人文社会系研究科, 2009.
- (21) 三村竜之, デンマーク語モーラ説の批判的考察, 東京大学言語学論集 27, 2008, p147-161
- (22) 上野善道, 日本語のモーラ、ラテン語のモーラ、英語のモーラ, 国語研究 64, 2001, p8-16
- (23) Ladefoged, Peter, Phonetic Data Analysis: An Introduction to Fieldwork and Instrumental Techniques, Oxford: Blackwell, 2003.
- (24) 三村竜之, アイスランド語アクセント史の構築に向けて, 音韻研究 24, 東京: 開拓社, 2021, p87-88
- (25) 三村竜之, アイスランド語ストレスアクセントの史的研究: 文献資料とフィールドワークに基づく試論, 北海道言語文化研究 19, 2021, p77-94
- (26) Magnússon, Ásgeir Blöndal, Íslensk orðsifjabók, Reykjavík: Orðabók Háskólans, 1989.
- (27) 三村竜之, ノルウェー語南東部方言のアクセントの再検討: アクセント論の視点から, 北海道言語文化研究 20, 2022, p61-89
- (28) Fischer-Jørgensen, Eli, Phonetic analysis of the stød in standard Danish, *Phonetica* 46, 1989, p1-59.

- (29) Smith, Svend, *Stødet i dansk rigssprog: en eksperimentalfonetisk studie*, København: Kaifers Boghandel, 1944.
- (30) 三村竜之, *ニューエクスプレスプラスデンマーク語*, 東京: 白水社, 2018
- (31) Mimura, Tatsuyuki, *Stress accent in Danish*, 東京大学言語学論集 22, 2003, p259-291.
- (32) Mimura, Tatsuyuki, *Prosodic compounds and the interpretation of secondary stress in Danish*, 音韻研究 11, 東京: 開拓社, 2008, p55-62.
- (33) Kiparsky, Paul, *Livonian stød*, The TREND phonology workshop, University of California, Santa Cruz, 1995 [Rev. Kiparsky, Paul, *Livonian stød*, Eds., Wolfgang Kehrein, Björn Köhnllein, Paul Boersma, Marc van Oostendorp, *Segmental Structure and Tone*, Berlin/Boston: Walter de Gruyter, 2018, p193-209.]
- (34) Tauli, Valter, *Phonological Tendencies in Estonian*, Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab, *Historisk-filologiske Meddelelser*, bind 36, nr. 1, København, Ejner Munksgaard, 1956.
- (35) Kuznetsova, Natalia, *What Danish and Estonian can show to a modern word-prosodic typology*, Eds., Rob Goedemans, Jeffery Heinz, Harry van der Hulst, *The Study of Word Stress and Accent: Theories, Methods and Data*, Cambridge: Cambridge University Press, 2019, p102-143.
- (36) Ross, Jaan, Lehiste, Ilse, *The Temporal Structure of Estonian Runic Song*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 2001.
- (37) Fox, Anthony, *Prosodic Features and Prosodic Structure: The Phonology of Suprasegmentals*, Oxford: Oxford University Press, 2000.
- (38) 松村一登, 宮野恵理, *まずはこれだけエストニア語*, 東京: 国際語学社, 2012

今治市の「無尽」から考える共助の社会

永井 真也*¹

(原稿受付日 令和 4 年 6 月 30 日 論文受理日 令和 5 年 2 月 9 日)

Thinking about a society of mutual assistance with reference to
Imabari City's 'Mujin' Group

Shinya NAGAI

(Received 30th June 2022, Accepted 9th February 2023)

Abstract

There was a speech by the former Prime Minister Suga on social management within the framework of self-help, mutual assistance, and public assistance. Is it possible to build a society in which people support each other through new mutual assistance?

First, Onda (2006) will explain the mutual aid and mutual aid system of the local community. Next, from A Field Study of Imabari City's 'Mujin' Group in Nagai (2019), I will introduce the situation of 'Mujin' Group as a mutual aid that still remains. 'Mujin' Group is a revolving credit union and is part of social capital. Accumulation of social capital brings about a virtuous cycle of becoming a richer region. It was concluded that elements such as common interest, empathy, trust, sense of belonging, and mutual aid are necessary in a mutual aid society, and it will be difficult to use them again in today's society.

Keywords : Mutual assistance, Revolving credit association, Social capital,

1 はじめに

今日、個人主義¹の時代といわれるようになって久しく、かつての共同体における集団的な生活を嫌って個人で生活する人々が増えている。古い家族制度を基盤とした閉鎖的な地域共同体の崩壊に代わって、新しく開放的なコミュニティが都市部において確立されると考えられていたが、そうなのではない。1969年に首相の諮問をうけた国民生活審議会の調査部会が「コミュニティ：生活の場における人間性の回復：国民生活審議会コミュニティ問題小委員会報告」（経済企画庁国民生活局編）⁹⁾を答申する中で、地域共同体の崩壊の原因については以下のような記述がなされている。

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

近年における日本経済の急速な成長は、産業構造変化および地域構造変化を通じて生活の場に対しても重大な影響を与え、これを激しく改変しつつある。その端的な現われとして滔々とした都市化の波は全国土を覆い、交通網の発展とモータリゼーションの進展による生活圏の拡大、人口都市集中、科学技術の発達とマスメディアの浸透等によって生活様式も否応なくこれに適応させられることになった。(経済企画庁国民生活局編 1969, p.155)⁽⁹⁾

そして、地域共同体の崩壊によって人間関係が希薄化した社会では、人のつながりとしてコミュニティという概念が登場した。コミュニティとは「生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人および家庭を構成主体として、地域性と各種の共通目標をもった、開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団」(前掲, pp.155-156)⁽⁹⁾である。この答申が出てから50年が過ぎたが、コミュニティによる社会の絆は芽生えぬままに個人主義は拡大し、地域社会は衰退しているのではないだろうか。

令和2年10月26日の菅内閣総理大臣所信表明演説(第二十三回国会)において、菅首相の「私が目指す社会像は、『自助・共助・公助』そして『絆』です。自分でできることは、まず、自分でやってみる。そして、家族、地域で互いに助け合う。その上で、政府がセーフティネットでお守りする。」といった発言の中で、「自助・共助・公助」が注目された。首相の所信表明演説において、社会の中に共助を位置づけた人々の支えあいによる社会が新しく意識された。しかし、国民が自分のために行う自助と税金で賄われる政府による公助は理解できるのだが、共助とは何であるかはっきりしない。

一般的には、防災において「自助・共助・公助」が用いられる。自助は津波などから自力で逃げて避難所などの安全なところまでの避難、防災グッズの準備などである。共助は避難訓練や避難用具の準備、避難所での助け合い、災害ボランティアなどである。公助は災害派遣や物資の支給など、役所や消防や自衛隊など行政による支援である。

また、地域福祉を管轄する厚生労働省では、互助を加えて「自助・互助・共助・公助」の四助を用いている。共助は社会保険のような制度化された相互扶助を指し、互助は制度化されていない家族や隣同士の助け合いによる相互扶助を指す。三助(自助・共助・公助)というときの共助を、社会保険制度と助け合いに分けて用いている。公助は、税金による公的扶助に限定されるようになる。

首相の所信表明にあるような新しい社会に、自助と公助にならぶ社会システムとして共助を用いるのであれば、共助の機能を議論し明確にしておく必要があるであろう。本稿は、共助に関する先行研究である恩田(2006)⁽⁵⁾の地域共同体における互助と共助の役割の説明を分析の枠組みとして用いつつ、現在の共助として永井(2019)⁽¹⁵⁾から愛媛県今治市の無尽²の調査を紹介する。最終的に、本稿で示した共助のある社会の前提条件から、共助のある社会の実現性を困難と結論づけた。

2 地域共同体における互助共助

かつての農村などの地域共同体は互助・共助による人と人の支え合いによって成り立っていた。恩田(2006)⁽⁵⁾の助行為の形態の分類(図1)では、助行為を私助と他助に分け、他助を公助と共助に分ける。さらに互(共)助では「互助」のユイと「共助」のモヤイに分ける。

地域共同体の互助行為には、ユイ、モヤイ、そしてテツダイといった種類がある。ユイとは、田植え、稲刈り、屋根の葺き替え等、ひとつの家ではできない作業を隣近所と相互に協力し合う労働交換のことである。現在では農作業の機械化や住宅様式の変化で労働交換は減ったが、今でもビニールハウスの張替え作業といった作業は労働交換で行われている。

モヤイは、入会地の収穫物や、持ち寄った茅の再分配など利益の再分配機能のある相互扶助である。本稿で取り上げる無尽(講)も、持ち寄った金を再分配するのでモヤイに分類され、現在に残る共助である。

ユイとモヤイは、他人への助行為を行った分だけ、相手から助行為の見返りがあることで成り立つ。恩田(2006)⁽⁵⁾の分類には、公助には公益、互(共)助には共益が関係する利益として示されている。

図1に記載されていないが、互助行為の他にも相手への一方的な助行為として片助行為としてテツダイ

がある。葬式のテツダイなど本来は見返りを求めないのだが、実際には感謝の気持ちの表現やお礼の品など見返りを求める。テツダイは横のつながりだけではなく、世代を超えた縦のつながりがあり、年長者が後見人として行う名付け親、仲人が含まれる。

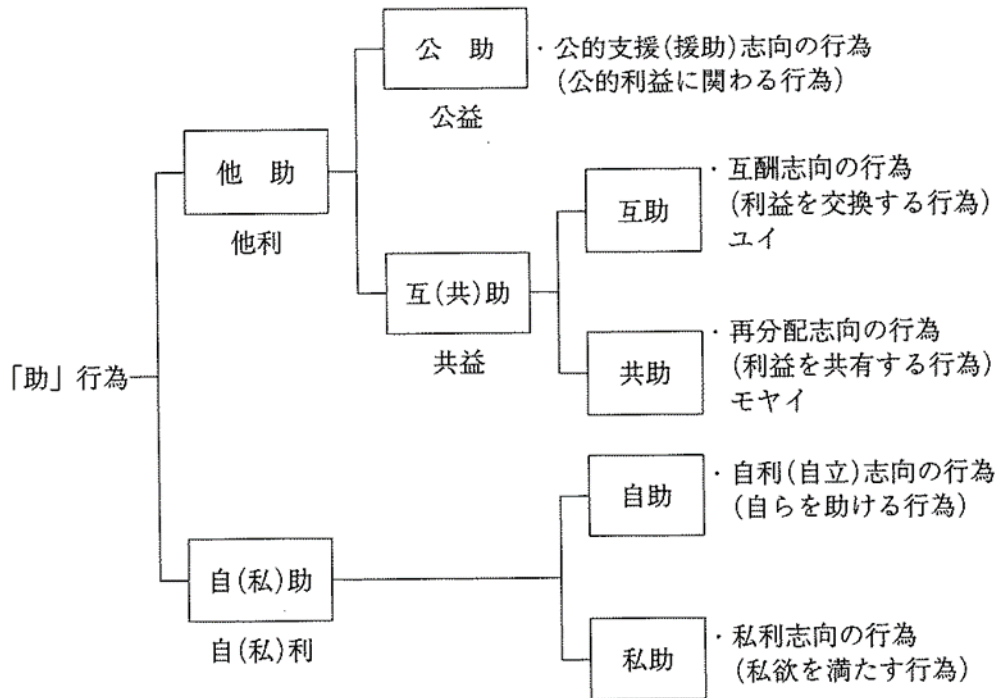


図1 「助」行為の形態 恩田 (2006、p.16) (5)

地域共同体は生産活動や生活における労働交換や利益再分配、困ったときの支え合いのシステムを内在することで成り立っていた。ユイ、モヤイ、テツダイのつながりが地域共同体内に信頼のネットワークを形成する。また、助行為のやりとりから、以下のように共感や帰属意識が生まれるのである。

この互助社会は、相互に支え合う「助」行為を通じた他者との連携と共生に基づく。相互ネットワークはヒト、モノ、カネに関わる経済的機能だけでなく、他者との喜怒哀楽「共感」(同感)の発露や同じ地域の一員としての帰属意識に基づく相互信頼の確認や維持といった社会的機能を担っている。(恩田 2006、pp.25-26) (5)

地域共同体は互助社会として機能しており、特に入会地といわれる共有地では共同作業とその利益の再分配が行われていた。共有地からの共益の再分配、共有地を共有し分け合う行為からの共感、共有地のある地域共同体への帰属意識、繰り返される活動から信頼が育まれる場が地域共同体であった。

しかし、今日では共有地は存在していない。かつての共有地は、分割されて個人の所有地になるか、国や地方自治体の財産となっている。共有地における共同作業や再配分が地域共同体から消えてしまったことが、地域共同体の崩壊につながった。もし、「自助・共助・公助」として共助を求めるのであれば、地域共同体で機能していた共助の分析から、共益、共感、帰属意識を支え合う集団の形成要因として共助を考えなくてはならない。

3 無尽(講)の概略

無尽(講)に関する最初の記述は、1275年の高野山領紀伊國猿川真国三箇庄官請文十条であるとい

われている。民衆の金（カネ）による相互扶助として行われ、東日本では無尽講、西日本では頼母子講と呼ばれていた⁽¹⁷⁾。

集めた金を再分配する講はモヤイの一つの形態である。金に困った家が出たら、その家の人を親にして無尽（講）を発会し、家々が同額の金を出しあって、最初に集まった金をすべて親に渡して支えた⁽¹⁰⁾。翌月にも同じように金を集めて次の家が受け取り、すべての家が受けとって一巡するまで続けられる。

明治時代の日本が近代化する 1880 年代と 1890 年代に無尽（講）が盛んになり、急な社会の変化や松方デフレを生き延びた庶民の知恵として無尽があったと考えられている。当時、金を貸して利息を取って月々返済させる営利目的の無尽（講）が現れ、金貸業として行われていた。商売に無尽（講）を応用した愛媛県今治市の櫻井漆器は、大阪で漆器を販売して毎月代金を回収する商売方法をはじめ、現在の割賦販売の始まりといわれている。

1915 年に定められた無尽業法によって、営利目的の無尽（講）は県単位でとりまとめられ、一県一無尽の金融機関として集約された。後に無尽銀行は相互銀行になり、さらに現在の第二地方銀行となった。無尽業法の後も、地域共同体で無尽（講）が続けられていたが共同体の崩壊によって行われなくなり、商売人同士の無尽（講）も商店街の衰退によって行われなくなった。榊原（2014）⁽¹²⁾は「効率的な銀行から融資を受けられない人が集まって無尽講を作り、相互扶助で融資を行っても、その融資の非効率性から長期的には消滅することになる」と、理論的に融資手段としての無尽は続かないと述べており、実際には民間金融の発展によって無尽（講）は消えていったのである。

しかし、無尽（講）を続けている地域がわずかに残っており、福島県会津市⁽¹¹⁾、石川県輪島市⁽¹⁴⁾⁽¹⁶⁾、山梨県甲府市⁽¹⁾、愛媛県今治市⁽³⁾⁽⁶⁾⁽¹⁵⁾、沖縄県⁽⁴⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾などで存在が確認されている。ヒト、モノ、カネにおいて行われたモヤイは、ヒトの労務交換は農作業の機械化によって減少し、モノは共有地の消滅によってなくなり、カネによる相互扶助は無尽（講）がわずかに残っているだけである。

4 愛媛県今治市の無尽

愛媛県今治市の事例から、今日も存在している無尽について考察する。筆者は 2015 年 12 月に今治市内の事業所の代表者に対して無尽に関するアンケート³を実施した。アンケートの方法は配布・郵送回収によるもので、今治商工会議所の「会報チラシ同封サービス」を利用した。2015 年 12 月分の商工会議所会報にアンケート用紙を同封して商工会議所の会員に 3,050 部を配布した。受取人払い郵便の封筒をアンケートと同封し、2016 年 1 月末締めで返信を依頼した。320 部を回収し、回収率は 10.49%であった。

アンケートの回答者は、商工会議所の会員を対象にしたため、男性からの回答が多く 90%（288 名）を占めた。全体で無尽を経験した人は 83.75%（268 名）であった。

（図 2 を参照）無尽をする理由についての質問（重複回答可）には、「これまでの人間関係（しがらみ）」という回答が最も多く、無尽を経験したことがあると回答した人の 69.40%（186 名）であった。次いで、「情報収集」は 59.70%（160 名）、「会話を楽しむ」52.99%（142 名）、「飲食を楽しむ」50.30%（135 名）、「新しい出会い」31.71%（85 名）が回答の上位を占めた。一方、「個人の資金繰り」7.46%（20 名）、「会社の資金繰り」1.87%（5 名）は比較的少なく、庶民金融としての無尽の役割は低下していることがわかった。

社会の変化とともに無尽の方法が変化し、金を集めて再配分を行う無尽と金を扱わずに集まって飲食だけを行う無尽が存在する。前者を金融型と呼び、後者を親睦型と呼び、それぞれの参加数を質問した。

（表 1 を参照）一カ月あたり金融型 317 回、親睦型 398 回という結果で、本来の無尽の目的であった金の再配分機能のある金融型は半分以下の割合になり、人が集まる無尽のネットワーク機能として親睦型が多くなっている。筆者の経験では、今治市内で大学の同窓会が月に一回開かれており、同窓生同士の金融型の無尽ではじまったが、いつからか親睦型の無尽に変化したようで、同窓生であれば誰でも参加できるネットワークとなっており、筆者も参加したことがある。親睦型の無尽が増えた背景は、参加者が高齢化したために資金繰りのために無尽をする必要がなくなり、これまでの人間関係（しがらみ）で続けているのである。金融型と親睦型をあわせた全体の無尽参加数は一人当たり月 3.65 回であったこ

とから、今治の事業所の代表者ならば、週に1回程度の割合で無尽に参加している。今日では、今治の社交文化として続いていると考えられる。

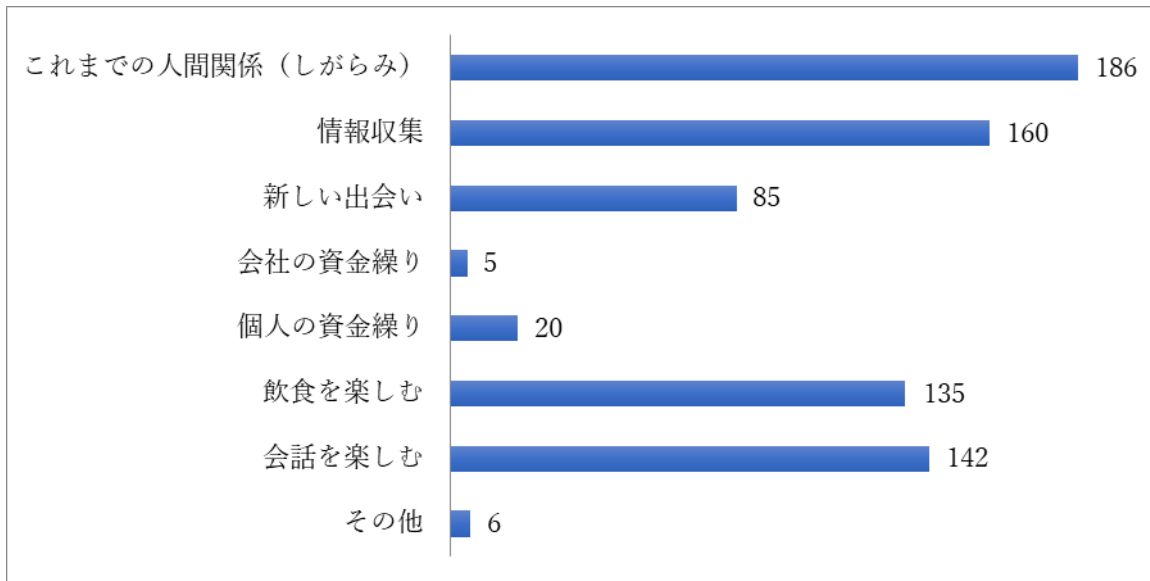


図2 無尽に参加する理由

表1 無尽の形態別の参加数

	金融型	親睦型	合計
回数の総数	317	398	715
回数の回答者数	135	149	196
平均値 (回数/月)	2.35	2.67	3.65
最高値 (回数/月)	14	20	20

今治市では昔から「石を投げたら社長に当たる」といわれるほど零細企業が多く、経営者の多い土地柄であるので、経営者の中で無尽が残っていたと考えられる。経営者以外の市民も無尽に参加しているが、金融型の無尽であれば、金と食事で一回2万円の参加費が相場なので、勤め人では多くは参加できないそうである。

無尽について質問すると、呉服屋経営の男性は「先代も15個、私もかつては15個ぐらい無尽をしていて、無尽の仲間が娘さんの晴れ着を必ず買いに来てくれた。まさに運命共同体。」と話した。

他の経営者は、「銀行の融資は資金使途を細かに説明しなくてはならないが無尽は不要で少しのお金を融通するのに便利で、季節商品の入替え資金などは無尽で入ってくる資金でまかなえる。」と教えてくれた。

当時の愛媛新聞社今治支社長と地元FM局の代表者に、アンケートの結果について尋ねたところ、肌感覚で正しいというコメントをもらった。そして、金融型の無尽をしていても「これまでの人間関係 (しがらみ)」と「情報収集」が目的に多いことについて、「見栄があるのでカネとは言わないでしょう」と話していた。

他にも、アンケート調査に先立つ今治市内でのヒアリング調査で、無尽に関する話を伺っているので以下に紹介する。

- ・無尽の始まるきっかけは、同窓会、同じ部活、仲が良かった仲間、様々である。
- ・無尽は夜だけでなく、昼のランチでもやっている。モーニングの無尽もある。幼稚園のママ友が卒園後にも行う。
- ・旅行の積み立ての無尽もある。
- ・船会社の社長は、一回に一人百万出す「百万無尽」を行っていた。内航船の頭金になる。
- ・子どもの頃に、親父が無尽と言ってしょっちゅう飲みに行っていた。無尽に行くといったら大手を

振っていける。大人になったら無尽はしないでおこうと思っていた。

- ・お母さんにも同期会など無尽がある。
- ・今治では噂がすぐに広がる。無尽のせいだといっていた。
- ・父親が亡くなったときに、父親の名前を冠にした無尽を開いて父を偲んでくれた。
- ・無尽の穴（カネだけ取って逃げる）が空いたら、親が埋めて無尽崩れを防ぐ。
- ・割烹など飲屋が無尽の親になって、無尽で客を集めているところが多い。
- ・金融型の無尽を行うときには11人で行って一回に11万円集め、自分の出した1万円を差し引いて10万円持ち帰ることができるようになっている。

今治市内の無尽の形態は、金の有無、発会の動機、参加者、時間帯などに多様な組み合わせがあるが、人々の間では無尽は一般的な存在であり、今治の文化と言ってもいいだろう。

共助として今治市の無尽を考えると、金融型はモヤイとしての相互扶助で、共益がある。発展した親睦型も同じ今治の人々であるから共益の意識を持って行っているのではないだろうか。そして、共感、帰属意識といった要因についてはヒアリング調査の中で感じられた。

他にも、ゆるキャラグランプリ2012において、今治市のゆるキャラの「バリィさん」がゆるキャラ王者になったことは今治市民の誇りとなっている。前年度の熊本県（当時の人口181万人）のゆるキャラ「くまモン」が約29万票を獲得してゆるキャラ王者になったのに続いて受賞した。県単位のゆるキャラの受賞の後に、市単位のゆるキャラである今治市（当時の人口16万人）のバリィさんが約55万票集めた。今治市民が一体となってバリィさんに投票をしたと聞き、今治市民の共感、帰属意識を表すひとつの事象であると感じた。

今治市では、無尽を通じて、共益、共感、帰属意識が繰り返される中で信頼が生まれ、信頼のネットワークを形成していることが考えられる。

5 ソーシャルキャピタル論からの補完

社会資本（ソーシャルキャピタル）の研究におけるロバート・パットナム（R.D.Putnam）の功績は有名であり、「哲学する民主主義」（河田訳2001：p.207）⁽¹⁸⁾には日本の無尽（講）も含め世界中に回転信用組合（Rotating credit association：原文表記）があるという。それは社会資本によって促進される自発的な協力の有益な事例であり、『回転信用組合は、「定期的に一定の金額を組に拠出し、出資者は、順番に集まった金額の全部あるいは一部を受け取ることができる」グループからなる。』（前掲、p.207）の記述から、日本の無尽（講）は回転信用組合として社会資本であると評価できる。また「通常の社会資本の場合と同様に社会資本に恵まれた人々ほど、より多くの社会資本を蓄積する傾向にある」（前掲、p.210）ので、社会資本の豊かさはさらに豊かさをもたらすという好循環⁴が存在する。

今治市では無尽を通じたの付き合いの中で共益、共感、さらに信頼や帰属意識が生まれ、さらにパットナムの研究から、社会資本を蓄積⁵させていることが考えられる。特に無尽を行う理由で2番目に多かった「情報収集」から、互いの信用情報や情報ネットワークとして無尽が機能していることが考えられる。呉服屋経営者が無尽を「運命共同体」と言ったように、無尽のネットワークは生き残っていく上で必要なものである。

6 互（共）助の社会は訪れるか

地域共同体の崩壊によって共助が消えた今日の社会において、新しく共助によって絆のある社会を構築することは有意義である。1995年の阪神淡路大震災でのボランティア活動が社会に認知され、1998年にはNPO法（特定非営利活動促進法）が制定され、新しい共助が社会の一部となった。NGOも含めて非営利の活動の存在感は増している。

災害ボランティアは共助に属する支援行為である。被災者を支えるボランティアの人々がいたたまれずに支援を行っていたとしても、被災者は「阪神淡路大震災で支えてもらったから、東日本大震災で支援をしたい。」「東日本大震災で助けてもらったから、胆振東部地震でお返しをしたい。」と助を返そうとする。こうしたことから災害ボランティアの共助としての共益が存在し、国単位で災害ボランティアの行為や支援金が集められ被災地に送り届けられ、次の機会には同じように支援をする支え合いが生み出されている。

だが冒頭に述べたように、今日の地縁社会の付き合いに共助は存在していない。プライダル産業、葬儀場など民間事業者のサービスが登場し、労働交換によって助けられたら助け返すような作業はなくなったといわれている。前述した通り、共同作業で管理する共有地もないので、ヒトとモノにおける共助

は必要ないのである。

現在も残る今治市の無尽の例は、カネの共助であるが、実際には生きていく上で必要な情報収集の場として機能していた。そして、他の地域で共助が衰退する中で、今治市に無尽が存在し続けたのは、社会資本がもたらす好循環があったからである。

全国土における共助の社会の構築には、社会資本の蓄積のできるような地域社会であることと、そのための共益、共感、信頼、帰属意識、相互扶助といった前提条件がそろっていることが求められるので、自助と公助に並ぶ共助を求めることは難しいと本稿は結論づける。

-
- 1 本稿では、共同体において集合的に生活を営む家族主義に対する概念として個人主義という表現を用いる。具体的には共助や互助に頼らずに、公助と自助によって生活する生き方である。
 - 2 今治市では無尽と呼ばれている。地域によって無尽講という場合もあるので、判別がつかないときには無尽（講）と表現する。
 - 3 アンケート結果は永井（2019）⁽¹⁵⁾に記載している。
 - 4 社会資本が減少する悪循環も存在する。
 - 5 今治市の産業として、タオル産業と造船業がある。今治タオルで有名なタオル産業クラスターと、今治造船や新来島どっくといった日本を代表する造船会社が存在する海事クラスターである。

文献

- (1) 朝日新聞 (第2山梨), それ行け!やまなし探偵団, 2016年9月16日26面
- (2) 麻島昭一, 無尽業の存立基盤とその変容, 国連大学・人間と社会の開発プログラム研究報告, 1981, pp.1-30
- (3) 愛媛新聞, 今治「無尽」アンケート調査, 2016年5月5日6面
- (4) 大木憲夫, 宮古島における模合集団—平良市松原の事例から—, 社会人類学年報, 弘文堂, 1978, pp.207-222
- (5) 恩田守雄, 相互扶助論 ユイ、モヤイ、テツダイの民族社会学, 世界思想社, 2006
- (6) 株式会社愛媛銀行, ひめぎん物語, 株式会社愛媛銀行, 2015
- (7) 北島照明, 沖縄における模合の実態(1), 商学集志(日本大学商学研究会), 第41巻4号, 1972, pp.9-109
- (8) 北島照明, 沖縄における模合の実態(2), 商学集志(日本大学商学研究会), 第43巻1号, 1973, pp.77-94
- (9) 経済企画庁国民生活局編, 「コミュニティ: 生活の場における人間性の回復」(別名: 国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会報告), 1969
- (10) 桜井徳太郎, 講集団成立過程の研究, 吉川弘文館, 1962
- (11) 佐治靖, 「無尽講」の成立と展開—都市の民族研究をめぐって—, 福島県立博物館学術調査報告書 第19集 町の歴史と民俗(福島県立博物館), 1989, pp.137-158
- (12) 榊原健一, 無尽講の経済的意味, 経済研究(千葉大学)29巻3号, 2014, pp.133-146
- (13) テツオ ナジタ, 五十嵐暁郎監訳, 福井昌子訳, 相互扶助の経済 無尽講・報徳の庶民思想史, みすず書房, 2015 (Tetsuo Najita, ORDINARY ECONOMICS IN JAPAN, The University of California Press, 2009)
- (14) 砺波和年, 寄り合いの経済学・ルポ頼母子の世界, 北国新聞, 16回連載(1月3日—1月18日), 1990
- (15) 永井真也, 今治無尽の実態調査, 室工大紀要, No.68, 2019, pp.57-67
- (16) 松崎かおり, 経済的講の再検討—『輪島塗』漆器業者の頼母子講分析を通じて—, 日本民俗学, 日本民俗学会, 1993, pp.63-104
- (17) 三浦圭一「中世の頼母子講について」『史林』第42巻6号, 1959, pp.1-22
- (18) ロバート パットナム, 河田潤一訳, 哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造, NTT出版, 2001 (Robert D. Putnam, MAKING DEMOCRACY WORK, Princeton University Press, 1993)

図 書 館 委 員 会

委員長	附 属 図 書 館 長	理 事	佐 藤 孝 紀
委 員	も の 創 造 系 領 域	教 授	清 水 一 道 (紀要編纂部会部会長)
〃	し く み 解 明 系 領 域	教 授	庭 山 聡 美 (紀要編纂部会委員)
〃	ひ と 文 化 系 領 域	教 授	松 本 ますみ
〃	創 造 工 学 科	教 授	清 水 一 道
〃	創 造 工 学 科	准 教 授	金 沢 新 哲
〃	シ ス テ ム 理 化 学 科	准 教 授	佐 賀 聡 人
〃	シ ス テ ム 理 化 学 科	准 教 授	岸 本 弘 立
〃	理 工 学 基 礎 教 育 セ ン タ ー	准 教 授	内 免 大 輔 (紀要編纂部会委員)
〃	総 務 広 報 課 図 書 学 術 情 報 室	室 長	堀 越 邦 恵 (紀要編纂部会委員)

令和5年3月22日 発行

編 集 室 蘭 工 業 大 学
発 行 〚050-8585 室蘭市水元町27-1

表紙デザイン 目 黒 泰 道

